

「閏」信長

本能寺ノ変の真実！

岸本善英

はじめに

本能寺の変は、日本の歴史上最も有名な事件の一つである。しかし、真実が語り尽されたわけではない。四五〇年ほど前の事件が正確に見えて来ないそれは何故か？

勝者によつて書かれた物語に惑わされるからである。

眞実の歴史を知るには、その時代を生きた人々の痕跡を探る事から始めないといけなないと思う。伝説ではなく、余り語られていないが、信頼できる史料を元にし眞実

を追いたい。

そして、一つでも多くの事実を推定できれば幸いだと考える。

さらに星のごとく、日本史上初とも言える「大天才」「大魔王」両面の顔を持つ織田信長が、戦国の世に登場する。

本能寺の変は、ひよつとすると時代の使命を終えた信長の必然的な最後であつたのかも知れない。

本書では、私の考える本能寺の変の背景と、その結果を元に明らかになつた真実を描きたい。

特に伝えたいのは、今まで余り

言われて来なかつた、徳川家康と明智光秀配下の武将である、斎藤利三の関係である。

そして、信長配下の武将たちの抱えていた「恐怖」と「不安」。

この負のエネルギーは、結果的に日本の歴史上、特筆すべき大改

革者をも呑み込んでしまった。

本編で詳しく書くが、「斎藤家」と「徳川家」との関係、精神的に追い詰められた者たちが最後に頼る旧秩序。

この時期に渦巻く、「恐怖」と「不安」、この二点が決起の理由

だと考えており、光秀は無計画に行動したのではなく、限られた環境の中で考えつくされた行動だと確信する。

今までにない視点で読者の方々の歴史観のお役に立てればと思いき執筆した。

先ず、この時代の大まかな流れを確認して頂こう。

朝廷、将軍義昭、織田軍団、その他の戦国武将、そして宗教勢力。どの集団も、決して独立して存在するのでは無いので、複雑に絡み合う勢力の検証も必要だ。

信長が行う大改革は、それを理解し進めた推進派と、旧秩序を守ろうとする守旧派の対立の様なものではなく、信長の大改革を理解し心酔した者は一人としていなかっただであらうし、無理だと考える。

私が本書で明確にしておきたい

のは、この時代において、たった一人の大天才、大魔王信長が登場し、その血を受け継ぐ息子たちでさえ、天才の片鱗すら継承できなかった事実だ。要は、この時代の武将たちを色分けするとしたら、「信長」か「それ以外の武将」の、

大きく分けて二通りしか存在しない。

信長以外の誰も理解できない時代の大きなうねりは、全ての人々にとって恐怖以外の何物でもなく、得体の知れない大きな不安、蓄積する負のエネルギー。

天正十年（一五八二年）、この時期すでに、先の見えない恐怖が頂点に達し、大爆発寸前で、もう誰にも止める事はできなかつた。

凶行を実行した、明智光秀と、本能寺の変が起こるかもしれない事を予測できていた勢力、この衝

撃を千載一遇のチャンスとして利用する秀吉、虚を突かれた家康。変の首謀者として、斎藤利三の重要な役目。後継者と成りえた秀吉の能力、旧秩序に頼った光秀、地の不利であつた家康。

歴史に偶然はなく、やはり必然

で流れて行くのかも知れない。私
が考える本能寺の変とは、けっし
て偶然の産物ではなく、やはり必
然性の高い事件だと考える。

目次

- ・ はじめに
- ・ 信長の功罪
- ・ 本能寺の変
- ・ 隠された真実
- ・ 背景

・ 恐怖と不安

・ 信長の近習

・ 別所や荒木の離反

・ 室町幕府十五代将軍「足利義昭」

・ 千利休

・ 細川家の思惑

・ 長宗我部元親

・ その時！ 天正十年夏

・ 秀吉伝説

・ 長宗我部討伐軍

・ 丹羽長秀と安土城

・ 羽柴秀長

・ 幻の明智、徳川連合

・ 斎藤利三

・ 毛利家の謎

・ 徳川家康

・ 織田徳川同盟

・ 本多正信

・ 三職推任

・ 暦の変更

・ 唐突な処分

・ 織田信長

・ おわりに

信長の功罪

最近の流れでは、織田信長の残忍性は、擁護される事が多いのだが、戦国を終わらせる為に必要な殺戮。本当にそうだろうか？

代表的な事件に、比叡山延暦寺

の焼き討ちと長嶋一向一揆の根切りなどがある。長嶋一向一揆の根切りとは、「根切り」つまり皆殺しの事だ。この時代、戦国時代であるから、殺し合いは当たり前であるとか、一向宗は女も子供も死ぬまで戦うので、皆殺ししか方法

がなかつたというのが通説である。

実はそうではない、この信長の例が特異な歴史的事実なのであつて、けつして当時の常識でも考えられないほど、重大な事件だつた。

戦鬪員は女でも子供でも殺さな
いとイケない時代だろうが、降伏

してきた女子供は通常殺さない。
なぜなら、働き手などの民が必要
だからで、誰も住まない土地を征
服しても意味がないからである。

この戦いも、当初は一向宗側が
優勢で、信長の弟、織田信興など
も打ち取られてしまい、信長の残

忍スイツチが入ってしまった結果だと考える。

信長の戦いは、通常、一般の戦国武将となんら変わらない。できるだけ消耗戦を避けて、味方の兵力の温存をはかる。

しかし、時によく分らない理

由で部下に負担を強いる命令を出す。これでは、強権政治そのもの。

信長を天才と思ひ込み過ぎの症状。秀吉、家康の様な晩年がないので、失策が目につきにくい。

長島一向一揆も、やり過ぎの虐殺であつた事実には冷静に見ないと

いけないはずである。

次に、比叡山の焼き討ちである。僧兵を皆殺しにする事は、敵対勢力である以上仕方のない事かもしれないし、浅井・朝倉を倒す為にも、必要であつた。

しかし、里より避難して来た女、

子供も含め皆殺しとは、やはり常軌を逸した行動としか思えない。

比叡山の焼き討ちに関しては、信長以前に前例がある。足利義教である。

この室町幕府六代将軍義教は、

僧兵を根本中堂に押し込めて焼き殺した大魔王。(この焼き討ちは、僧兵自ら火を付けた説もある。どちらにしても追い詰められた事に変わりない)

この事件は、応仁の乱以前の話だが、義教は、信長以上に苛烈な

政治を行い、万人が恐怖した。それこそ、一般市民にまで恐怖政治が及んだ。

元祖大魔王と言つても良い足利義教でさえ、女子供を含めた皆殺し、根切りは行っていない。しかし恐怖政治の末路は同じで、赤松

満祐の屋敷で祝宴の最中に暗殺されてしまう。

いつも、このような結果になるのは、日本独特の負のエネルギーのもたらす結末ではないだろうか。

義教は、くじ引きで將軍となつた人物で、当時は、くじ＝神のお

ぼし召し、つまり神に選ばれし將軍だと考えた。この説は、井沢元彦氏の著書が詳しいが、私もその通りだと考える。神に選ばれし存在。自分は特別だと思つう様になる。

実際、非常に能力の高い、そして強力に幕府、武家政治を實行し

た將軍であつた。

私は、どうしても信長とイメー
ジが重なる。

そして、配下の武将の謀反にあ
う。改革、恐怖政治の末路は同じ
なのか。

室町幕府第六代将軍「足利義教」

とは、（在位、一四二八年～一四四一年） 三代将軍足利義満の三男で、応永二十六年（一四一九年）には、百五十三代「天台座主」となり、その後一時「大僧正」も務めた。

天台座主とは、日本の天台宗の総本山である「比叡山延暦寺」の住職で、天台宗の末寺を総監督する役職である。義円と名乗って門跡となっていた「義教」に室町幕府の將軍職への就任のチャンスが巡って来た。

石清水八幡宮で、くじ引きを行い、義円に白羽の矢が立ったわけ
で、ここから彼は「籤引き将軍」
とも呼ばれる事になる。天に選ば
れし将軍となつた。

義教が行つた恐怖政治は、信長
のものとは異質ではあるが、関係

する者たちの感じる「恐怖や不安」
は同じ種類のものであつた事であ
ろう。もちろん、政治面での手腕
は大したもので、幕府の威信は回
復した。

義教の政治が、もう少し長く続
けば、ひよつとしたら応仁の乱は

起こらなかつたかも知れない。少なくとも、あのような長きにわたる大戦乱にはならなかつたかのではないか。

信長の場合の残忍性も、効果は絶大で、各地の信長への抵抗勢力（信長にとっては抵抗勢力）に大

きなメツセージとなった。

私がここで言いたいのは、この信長の激情的残忍性が、天下統一を道半ばで終わらせ、明智光秀という腹心の部下に寝首をかかれる結果を招いたと考える。

私は何も、信長が多くの人を殺したので残忍であり、天罰が下つて殺されたなどと言っているのではない。

必要以上の殺戮を行つた背景にあるのは、理念や信念ではなく、瞬間湯沸し器的な激情的決断だと

言いたいのだ。

この決断に垣間見られるのは、天下国家を語る信長像ではない。明らかに、個人的感情、信長の技量の限界が露呈していると確信する。

「天下布武」を掲げ、尾張の田

舎大名から勢力を拡大し、今川義元、武田信玄、上杉謙信など、正面きって戦えば、ほぼ勝ち目のない相手たちとの戦いを、天命で切り抜けた信長。

信長の考える天下統一は、きっと日本国内だけでは完結しなかつ

たと想像できる。

後の豊臣秀吉の行動を見ても分かる様に、朝鮮半島へ進出し、明と対峙したと思われる。しかし、秀吉は、信長を真に理解していたわけではないので、朝鮮半島で意味のない戦闘を行い、貴重な人材

を失った。

信長の大陸進出計画は、秀吉型出兵の様な、愚行な計画ではなかったはずである。

この時期既に秀吉は、若き頃の日輪の輝きを失っていた。

信長の一貫性の無い残忍性が、

恐怖を呼び、当初は敵対する者だ
けに向かっていた症状が、ある時
から部下へも感情がおもむく様
になる。

恐怖という魔物が信長の配下の武
將たちの心を押し潰して行く。耐
えがたいほどの恐怖と不安。足利

義教を暗殺した、赤松満祐ほど追いつめられていないかもしれないが「あの人さえ居なければ・・・」様に考えた者たちは、一人や二人では無かった事だろう。

しかも、赤松氏よりも、明智光秀には、その後の展望には自信が

あつたものと思える。

光秀の決断、これには、斎藤利三と徳川家康の準備もあつたればこそ。

将軍義昭は、健在なので、室町幕府の復活をにらんでの覚悟の行動だと推察する。

光秀は、結果として室町幕府を復興させようと考えたであろうが、それは信長亡き後の安定を望むからであつて、あくまでも第一の目的は、信長を葬り去る事のみであつた。

改めて申し上げるが、本能寺の

変とは、徳川家康と斎藤利三にス
ポットを当て直さないと眞実は見
えて来ないと考える。

ここで、本能寺に至るまでの過
程を簡単に明記する。

◇永禄二年（一五五九）

・二月「信長」、上洛し十三代
將軍「義輝」に拝謁。

◇永禄三年（一五六〇）

・五月「信長」、今川義元を桶
狭間で討取る。

◇永禄十一年（一五六八）

・九月「信長」、十五代将軍「義昭」上洛。

◇元亀二年（一五七二）

・九月「信長」、比叡山焼き討ちを行う。

◇天正元年（元亀四年）（一五七

三）

・四月「武田信玄」、上洛行軍中に病没。

◇天正二年（一五七四）

・四月「顕如」（石山本願寺）、信長に対して挙兵。

◇天正三年（一五七五）

・五月「信長」、長篠の合戦で、

武田勝頼を破る。

◇天正六年（一五七八）

・十月「荒木村重」、信長に反旗を翻す。

◇天正七年（一五七九）

・「信長」、家康に嫡男「信康」

正室「築山殿」を殺させたとされ

ている。

◇天正八年（一五八〇）

・八月「信長」、佐久間信盛や
林通勝などを追放。

◇天正九年（一五八一）

・二月「信長」、馬揃えを行う。

◇天正十年（一五八二）

・三月「信長」、武田勝頼を滅ぼし、甲州遠征を行う。

◇天正十年（一五八二）

・六月「信長」、本能寺の変で自害。

確かに信長は、偉大な人物である事は間違いない。日本史上、特

筆すべきリーダーであつた。戦乱の時代を終わらせる為に必ず必要な人であつて天命を持つてこの時代を駆け抜けた。

では、功罪とはどの様なものだろうか。

「天下統一」、天下布武の様に

誰もが理解できる方向性を明確に提示した事は大いに評価すべきである。戦国と言われる時代は、後の世の我々がそう呼んでいるにすぎず、この時代を生きた人々にとつては、生まれた時から国盗りは当たり前で戦乱しか知らない。

群雄割拠であつて、自らの領土
領民を守る為に戦っている。もし
誰も攻めて来ないのであれば戦い
を仕掛けないのかも知れない。

全ての大名たちが、お互いを牽
制し合う状況。この中で、天下統
一だとか、戦乱を治めるとか、ま

して平和などと言う概念は信長以外は持ち合わせていないだろう。

尾張の田舎大名にしか過ぎなかった信長が、一地方都市であつた稲葉山城をやつとの思いで攻略し直後に突然「天下布武」を宣言する。

岐阜、美濃を平定しただけの小
さな勢力であつた頃にある。

この時既に信長は、武力による
天下統一を明確に目指したのであ
つて、他のどの大名には想像すら
できない目標である。

室町幕府は未だ健在で、この武

家の棟梁に取って代わろうなどとは誰も思いもよらない。天下布武とはそう言う事だと思う。

忘れてならない功績は文化面にも多い。

千利休など茶道の世界を世に広め、名工など今まで余り評価され

なかつた日本の職人を育てる土壤なども築いた。商いに対して、物流など人の流れや町づくり、都市を形成するにあたり必要なものは整備し邪魔なものは排除した。楽市楽座や検地はその代表例だろう。戦い方においても兵農分離や鉄砲

の導入、鉄鋼船など独創的な発想のものが多し。

政教分離については功罪では判断できないかも知れないが、後に秀吉や家康が完成させた様に、宗教改革への道筋を付けた事は間違いない。

ほんの一部の例をあげたが、思考も行動力も能力も、他に同様の日本人は歴史上でもいない。信長と言う人物はいかに特異な存在であつたかがわかる。日本の歴史上、このタイプの人間は後にも先にも信長だけではないか。

本能寺の変

天正十年六月二日未明、織田信長は本能寺に宿泊していた。

この時点の信長は、宿敵武田氏を滅ぼし、もはや織田氏に単独で対抗できる戦国大名が存在しなく

なり、自身の第一幕がほぼ完結した時を過ごしていた。第二幕への準備も着々と進みつつある順風満帆な時。このタイミングで事は起こった。織田信長配下の武将である、明智光秀が謀反を起こし織田信長を死に追いやった事件。

信長の慢心、油断と言われる事
件だが、はたして本当にそうだろ
うか？ 明智光秀がただ織田信長
を暗殺したいのであれば、大軍を
率いて事にあたるのはかえって不
都合であるはず。信長の傍に仕え
る光秀であれば、刺し違える覚悟

があればもつと容易に事が行えたであろう。そこには、大軍で京の都を押さえなければならぬ理由があつたはずである。

本能寺の変については、その原因とされる説は多くあり、幾つかを検証しながら紹介する。

「遺恨説」

遺恨説に關しては、多くの方に支持されており、今でも主流かもしれないが、私は有り得ないと考える。この説の場合、光秀は信長の仕打ちを恨み、信長は配下の武将に個人的な恨みをかつた事が要

因となる。

これは不自然である。信長は光秀を信頼し、光秀もそれに応えられるだけの技量や才覚があつた武将である事は間違いないので、遺恨説は光秀という武将の真の姿を歪めてしまっただけだろう。

例えば、よく言われることであるが、徳川家康への接待で、光秀に落ち度があつたという話。丹波攻めで、矢上城に籠もる波多野兄弟との交渉で、光秀の母を人質に差し出し投降させたが、信長は波多野兄弟を殺してしまい、光秀の

母が殺されてしまったという話。

領地にしても、苦心して治め、心血を注いできた丹波一国を召し上げ、毛利氏勢力下の出雲、石見、毛利二カ国に転封させる等々。

しかし、これでは信長は、「天才」や「魔王」ではなく、ただの

バカ殿だと言っているのと同じである。

いつの時代もそうであろうが、根も葉もない噂と、後世の作為的な作り話に惑わされてしまうものである。

この様な話の元になっている資

料のほとんどが、秀吉の命によつて書かれたものばかりで、秀吉は、光秀をおとしめるばかりか、信長という人物に対しても眞実を伝えていない。決して、良き殿、おしたい申し上げております上様として描いていない。作為的に信長の

欠点を忍ばせている。

秀吉という男の恐ろしさを感じ
る。

宣教師のルイス・フロイスも信
長と光秀の関係を一部、書き残し
てはいるが、この人の光秀評は、
全く信憑性に欠ける。信長びいき

の為に、謀反人光秀の評価が、個人的偏見で悪意を持って書かれており、光秀の実態を歪めてしまっている。

信長が光秀を叱責し足蹴りをしたとか、光秀の母を人質に出させ見殺しにしたとか後の時代の信頼

出来ない資料か伝聞などで、信憑性に欠ける内容ばかりを元にできあがった説である。

遺恨説は確かに面白いが、この時代を考える時には、余りにもスケールが小さくなつてしまふ。

戦国の武将である以上、この時

代のモラル「武士道」（江戸時代のものではない）もののふとしての誇りと、領国や領民の為、天下の為など、個人の思考を超えるものを常識的に持つていたはずだ。

したがって、遺恨、個人的な恨みなどの説は、光秀には全く無縁

の事であつたのではないだろうか。
まんまと、秀吉に乗せられて、
彼の張り巡らせた罫に、後世の我
々が引つ掛かっている様に思えて
ならない。

「光秀野望説」

光秀も武将なので、天下取りの野望に燃えた。

この様な考え方は、この時代（戦国時代）は、多くの武将が天下を意識したと仮定しているが、信長に取って代わって天下を治める

気などは、全くなかったのではな
いだろうか。

細川藤孝に宛てた、光秀自筆と
される書状が「綿考輯録」（めん
こうしゅうろく）に載っている。

書かれている内容は、信長を討つ
たのは、十五郎（光秀嫡男）や与

一郎（細川忠興）に天下を任せる
為である。譲るつもりである。こ
の様な内容であるがこんな物は、
細川家が保身の為にねつ造したと
考えて間違いない。だからこそ、
秀吉も深く追求せず、今日まで
資料として存在すると考えるべき

である。

本能寺の変にたいする「綿考輯録」の記述は全く信用できない。

細川家の研究で知られる、土田将雄氏も指摘している様に、細川四代「藤孝、忠興、忠利、光尚」の四代にわたって記されており、資

料価値としては高いが、細川藤孝あたりの記載は、時代背景もあるのだろうが、問題とされる箇所が非常に多い。

光秀が本能寺で信長を討つた後の政権運営の柱として考えていたのは、旧秩序の復活だろう。

簡単に表現するなら「室町幕府の再興」将軍や朝廷を中心とする権力構造。すなわち、「将軍義昭」の復権である。

光秀が信長の存在に取って代わろうとは思わず、その後の政権運営を誰に託せば良いかを考えたと

すると、一人しかいない。

しかし、目的は、室町幕府再興ではない。あくまでも、信長亡き後の世を戦国に戻すわけには行かないと考えたと見る。

山崎の合戦で、明智軍として参加した多くの奉行衆が居る。(室

町幕府幕臣）斎藤利三などと共に
よく闘い、そのほとんどが戦死し
ている。

これは、光秀や利三などと思いを
同じくし、信長亡き次の世、も
しくは將軍義昭の治世を夢みたか
らこそ、獅子奮迅の働きが可能で

あつたのかも知れない。

室町幕府の奉公衆や奉行衆と織田政権との関わり。光秀自身も幕臣であつた事は、ほぼ間違いないので、旧主家の復活、プラス朝廷の権威で国を治めるつもりであつたと考える。信長の野望を誰より

も理解し、恐怖と不安を抱き恐れ、本能的に排除しようとして決意したと思う。しかし、その後の国の行く末を考えると、再び戦国時代に戻してしまおうわけにはいかない。そう考えれば、頼るのは旧秩序しかない。

天正十年、本能寺の変当時、足利義昭十五代将軍は、毛利家の庇護を受けて「鞆の浦」に健在で、信長さえ倒せば、室町幕府の復興が可能。毛利、島津、長宗我部、上杉、北条、なども異は唱えないであろう。問題は、信長配下の武

将たち、柴田勝家、羽柴秀吉、上杉や毛利に対峙している以上、光秀自信、時間的余裕はあると考えたと思われる。この点は、油断でも何でもなく、誰でもそう考えるだろうし、秀吉の情報網と人脈の勝利。何よりも時代の流れを嗅ぎ

分ける嗅覚の鋭さが秀吉に天下を取らせたと思う。

信長の子息たちでは、歴戦のつわものの敵ではなく、信長の後継者になるチャンスは全く無かったという事だ。

そして、徳川家康。

この書の目的である「明智」と

「徳川」、いや「斎藤」と「徳川」

両家に関しては時代の結果が表わす以外の真実が隠されているので、断言して、明智光秀が天下人になるろうとしたと言われる野望説もあり得ないと思う。

光秀の野望説を語る場合に、もう一つ触れておかなければならぬい事がある。

それは、本能寺の変の三日前に愛宕山で詠まれたとされる連歌の会での光秀の句についてである。

「時は今 天が下知る 五月哉」

(天Ⅱ雨)

光秀の句は「時は今雨が下しる
五月かな」と詠んだと、一般的に
は伝わっており、私もその様に信
じていた。

しかし、明智光秀の子孫である、
明智憲三郎氏も強く主張されていてい

るが、この句は改ざんされて伝わり、本来の意味とは異なるのではないだろうか。

羽柴秀吉が意図をもって家臣の大村由己に書かせた、「惟任退治記」が発端で、プロパガンダに利用されたものと断定している（惟

任とは、光秀の事)。

私もこの句は、「時は今雨が下なる五月かな」であつて、「時」を「土岐氏」、「雨が下」を「天下」、など、謀反の決意を詠んだものではないと考える様に至つた。「雨が下なる」では、雨が降つ

ている情景だけを表す事になる。

愛宕百韻の連歌の会に参加した、連歌師の里村紹巴は、秀吉から疑われ詰問された時、光秀は「雨が下なる」と詠んだもので、誰かが「雨が下しる」に書き変えたものだと主張し難を逃れている。

秀吉は、それ以上追及できなかつたのではないか、下手人だからであろう。

京都大学付属図書館所蔵の写本では、この句は「天が下なる」と記載されている。

次に、太田牛一が書き残した「信長公記」にある記述について述べたい。

信長公記は、出来事を淡々と記録している、描写に優れた信憑性の高い資料。

しかし、さすがの太田牛一も全

ての出来事を直接見たわけではなく、伝聞や他の資料からの記載も少なからずある、この句に関して は、「時は今雨が下知る五月哉」と記載されている。

なぜ、信長公記の記述も「下知る」となるかと言え、太田牛一

のその後の人生を見れば分かる。

本能寺の変以後に、太田牛一は大村由己と共に、秀吉に仕えているわけであるから、秀吉の意向に従う記述もうなずける。秀吉を恐れた為と言うより、情報源として、大村由己の資料しか持ち合わせて

いなかっただのではないだろうか。

太田牛一は、愛宕百韻（あたごひやくいん）なる連歌の会が行われ
た事をしらなかつただろうし、秀
吉ルート「大村由己」、以外から
内容を知る事もできなかつたので
はないか。

この「大村由己」とは、播磨国三木の出身で、還俗して秀吉の御伽衆として仕えた人。秀吉の伝記として有名な「天正記」（惟任退治記、播磨別所記など八編）、秀吉の偉業を讃える物ばかりで、大村由己の置かれた立場からすると

しごく当然であるが資料としての価値は低い。

しかし、よく事実として引用される事柄の多くは、彼らの残した書物が出所ある事が多い。今で言う、スポーツスマン、宣伝マン、広報、マスコミであろうか、この

類の資料を面白おかしく読むのは
良いが、鵜呑みにすると、やはり、
それでは真実は見えて来ないだろ
う。

儒学者の、小瀬甫庵が書いた「
甫庵太閤記」や、川角三郎右衛門
が書いた「川角太閤記」など、そ

の他多くの太閤記ものは、全て一種の物語でフィクションである。

「朝廷黒幕説」

確かに、朝廷は信長の色々な圧力に苦しんでいた事だろう。しかし、朝廷にとっては今に始まった

事ではなく、武家勢力には時代ごとに色々な圧力を受け続けて来た。

天下布武を掲げる信長にですら、引き延ばせば時間が解決すると考えていたに違いない。正親町天皇や公家たちにしても、黒幕ほどの重要な役目を担うのは無理があり、

どちらかと言うと、ひそかに願う、夢を見る程度。したがって、朝廷黒幕説も有り得ないと考える。

この時朝廷は織田信長との間で暦をどうするかと言う難題を抱えていた。朝廷が採用している京暦に対して、信長は関東地方で広く

使われている三島曆に変更する様に強く圧力を掛け、朝廷はもはや絶体絶命であつた。だからと言つて黒幕の様に積極的に関与などせず、魔王退散を念じていただけだろうと思われる。

確かに、吉田兼見や勸修寺晴豊

などは怪しい動きをしている、し
かし本能寺の変を画策できるとい
う人物ではない。

ただ、吉田兼見の日記は怪しい。
兼見は公家であり、京都吉田神社
の神官で、彼が日々書いた「兼見
卿記」は、天正十年の日記が何故

か二冊存在する。

天正十年の正月から、新たに書き直した、「正本」と、天正十年正月から六月十二日で終わっている「別本」がある。

新たに書いた「正本」とは、創作日記であつて、フィクションで

はないか。では何故、原本の「別本」が現存するのか？

問題があるからこそ書き直した事実を隠したはずではないか、しかし両方とも手元に残した。

吉田兼見にとって、原本の「別本」は、心の赴くままに綴った真

実の日記であるはず。書かれてい
る内容を誰かに見られたらまずい
と考えたのではないだろうか。

誰に？

羽柴秀吉以外に有り得ない。

「別本」は、六月十二日まで書
いている。この日付で気が付く方

も多いと思われるが、そう、天下分け目の戦い「山崎の合戦」、まさに天王山、その時である。

秀吉軍（大将は名目上、信孝）

と、光秀軍は、十二日頃から、円明寺川（現、小泉川）を挟んで対峙した、まさにその日で筆を置い

ている。いや、天正十年の正月から新たに正本を書き始めたのである。

この自筆の日記を書き換える作業は重労働だった事だろう。

では、「別本」と「正本」の書き直した箇所にはどのような事が書

かれていますのか。ここでは改ざん部分を詳しくは紹介しないが、興味のある方は、ぜひ見比べて欲しい要約すると、主な書き直し部分に書かれていますのは、兼見自身や友人、朝廷関係者などが光秀との関わりある箇所を削除している。

改ざんは予想通りで、内容にさほど驚かされない。

しかし、何か引つかかる気がする。

そもそも、この日記が問題であるならば、天正十年の日記そのものを処分すれば良いのではないだ

ろうか？ 当初、兼見が考えたほ

どの危険が無かったからこそ、両方の日記が現存するはず。それなら、やはり日記を処分（天正十年のみを）し、適当な言い訳をすれば済むのではないか。もしくは、一時的に隠せば良い。

この「兼見卿記」に関しては何か大きなものを見落としている気がしてならないまだ我々の知らない、新たな発見や真実が隠されているのではないだろうか。

不審な点が多いのだが、朝廷側の人物で黒幕となれる人物もまた

皆無である。

「義昭暗躍説」

室町幕府十五代将軍「義昭」は、自身の思いが実を結び、憎き信長の最後を見届ける事はできた。義昭は、信念と努力の人で、執念と

も言える活動を、打倒信長の為に行い続けたが、しかし、黒幕ではない。

旧秩序の代表として再び担ぎ出される寸前だったが、秀吉という、信長の能力とはまた異次元の「ひとたらし」の天才の前に再び敗れ

去った。義昭自身、信長包囲網の命令者で、その作戦もあと一步の所までは信長を追い詰めたりもしたが、自身の不徳の致すところもあつて、実現にはいたらなかつた。

代表的なのは、元龜三年（一五七二年）武田信玄の上洛軍が、途中

で信玄が亡くなつた為に引き返した事だ。謙信も上洛直前に亡くなる。信長の強運、義昭の不運とでも言おうか。

よく、信長崇拝者の方々の中に、信玄だろうが、謙信だろうが、農閑期の軍団が一時的に勝利しても

結果戦鬪のプロ集団である信長軍には敗北する様な事を言われる方が多いが、本当にそうだろうか。

仮にあの時の武田軍が、上洛戦を信玄が健在で挑めば、信長軍は良くて互角か、それ以下の戦いを強いらられるはずである。この時点で

は、あの屈強な三河武士軍団は崩壊していて動けない。比叡山や本願寺など一向宗も健在だ。信長軍は、京を背にして戦うか、大坂方面に退くしかないだろう。

そうなれば、摂津衆は中川勢を筆頭に反信長へ雪崩を打つ様に襲

いかかる可能性が高くなる。戦国

時代とは、そう言うものだ。ただ、

この場合でも將軍義昭は主役ではなく、後に祭り上げられた可能性
があるだけの存在である。したが
って、本能寺の変の黒幕ではなく、
その後の展開によっては、明智光

秀によつて復権が叶うかもしれな
い程度の人であらう。

信長の死は願っていたが、変を
起す恐怖や負のエネルギーなど、
信長軍の内部事情に関してはうと
かつたであらう。

「非黒幕説」

では、本能寺の変は、どの様な要因で事が起こったか？ もちろん、ん、「恐怖や不安」この負のエネルギーだけでは、信長を倒す事はできない。事が成就する為の二つの極が存在した。それが、明智（

斎藤）と徳川である。

この時代、信長以外の武将、例えば武田信玄、上杉謙信、今川義元などの有力大名が京を目指したとしても、その行動は、足利将軍家よりの要請か、朝廷の命令などであって、自身の天下取りなどで

は決してない。

それは、「兵站」などの実情と、農閑期の行動として分析するとよく分かる（季節限定兵力）。

だからと言って「農民兵」が弱いと言っているのではない。よく、武田信玄や上杉謙信が上洛して、

信長軍と戦えば勝つのは難しいと
評価されるが、武田信玄の寿命が
後、半年、いや三ヶ月長ければ、
信長軍は崩壊していた可能性が大
である。それも壊滅的である。

なぜなら、武田軍対織田軍で考
える前に、この時期、将軍「義昭」

の号令の元、織田包囲網はほぼ完成しており、そこへ武田信玄が現れれば、日和見武将たちは全員、義昭側へ付き、織田軍内部には裏切り者や、風見鶏武将が続出するのは間違いない。

それに、運良く大決戦になった

として、織田軍は武田軍に勝てるのだろうか？ 兵力、単独軍としては、織田軍の方が数では勝る。

では織田軍が有利か？ 尾張の兵を中心とする織田軍の構成は、戦闘をする為に組織されている戦いのプロ集団で、武田軍は農閑期

だけしか戦えない、農民兵で農業との兼業である。では、やはり信長軍が勝つのか？

さにあらず、尾張兵は基本的に弱い。あの、三河武士を子供扱いして、三方ヶ原で簡単に撃破してきた武田軍は、途方もなく強いのだ。

である。そしてその名声は全国に轟いていて、上洛を望む者たちにはどれほどの希望で、勇気が倍增する思いかは想像できる。

ところで、この時の家康の行動には奥深いものがある。家康は後に天下を治めた後も、この三方ヶ

原の戦いで、の惨敗や自身の恥を訂正も取り繕いもしないで、伝えさせている。

家康の武将としても大ききさや能力の高さを表現する時に、この戦いが引き合いに出されるが、この後の行動はどう見ても怪しい。

家康という人は本当に熟慮するタイプで計算高い。武田軍を恐れ、て城に閉じ籠れば武田軍に攻撃されても持ちこたえられないし、領国を素通りされては、後々の自身の評価は下がる。

では、どうするか？ 本気で決

戦は挑むが、勝てないなら、負け方を考えて、武田軍をやり過ごす方を取った。どう言う事かと説明すると、武田軍にはもちろん勝つ可能性のある戦法で決戦を挑む。実際、三方ヶ原に入った武田軍に頃合いを見て後ろから総攻撃を掛

けている。しかし、武田軍は家康の予想を遥かに超える強さだった。では家康は次の手を打つ。

とても勝てない相手なら、武田軍の目的は上洛だから、さっさと西へ向かってもらおう事とする。

だから、徳川軍は再攻撃の能力

はなく、もう手も足も出せません、と見せかける。

事実、武田軍が徳川軍の掃討作戦を行っていたら、家康は隣国にでも落ちのびるしか方法はない。

武田信玄も、後ろから攻撃される心配さえなければ、速やかに京

を指し、たいし、できるだけ武田軍を温存し、織田軍にあたりたいと考えるはずで、家康の計算通りとなつた。

後は、家康にとって、頭の上がない信長が武田軍をどうするか、じっくりと日和見するだけで良い

のである。

ここでも家康の読みとは異なり、信玄の寿命が上洛前に尽きた。家康にしてみたらそこで命尽きるなら、三方ヶ原に到着前に尽きて欲しかったと思つたに違いないが、さして悪い結果ではなかつた。

今まで通り、信長の風下でこき使われるであろうが、武田の領地を切り取る先兵となる事もまんざらでは無い結果であつたらう。

では、もし信玄の寿命がもう少し長かつたとして、信長軍が蹴散らされて、義昭将軍が復活し、信

玄が副将軍あたりに就任したらどうするか？

簡単な事で、足利将軍家への服従を誓い、急ぎ京へ上り将軍に拝謁し、副将軍にでも就任する信玄にも同様に服従を誓えば、生き残れるだけの事である。

私は、本能寺の変は、非黒幕説
でよいと考えている。

黒幕などの存在はなく、信長の
天命は尽きていて、明智光秀が引
導を渡す役回りを演じ、秀吉はそ
の流れをつかみ取ったのではない
か。

秀吉は、情報戦に優れていたの
で、信長の危機を敏感に嗅ぎ付け
ていたし、もし事が起こった後の
シミュレーションは、頭の中で嫌
と言うほど繰り返していた様に思
える。

光秀や利三にとっても、最大の

チャンスが来た事には間違いなかつた。

なぜなら、信長を葬り去るだけなら、光秀ほどの側近であれば、刺し違える事ぐらいは可能であるから、いつでもできただろう。

しかしそれでは、また群雄割拠

状態で、戦国時代へ逆戻りしてしまおう。信長を討った後、日本国内を安定させるには、朝廷の権威プルラス、誰もが認める武家の棟梁が必要なのである。鞘の浦幕府に健在の將軍「義昭」。

光秀は、秀吉の情報網を知らな

いし、斎藤利三や徳川家康でさえ、中国大返しのような離れ業を予想できなかつた。

実は離れ業でも何でも無い、周到に準備を重ね、予期した行軍であつた。

隠された真実

明智光秀という人物の前半生については、よく分かっていない。

美濃「斎藤家」に仕えていたとか、越前朝倉氏に仕えたただとか、伝説は幾つもあるが、どれも信憑

性が低いものばかりで、信頼性の高い史料としては、「永禄六年諸役人附」がある。

以前から指摘されている通り、室町幕府の幕臣であつた事は、間違いないだろう。

一五六三年、將軍義輝（室町幕

府十三代）の時代、すなわち永禄六年時点の役人名簿。この中に、「足軽衆、明智」という名が書かれている。（ここでの足軽衆とは、江戸時代の足軽とは異なり、馬に乗らない幕臣の事）

この役人名簿は、継ぎ足しして

書かれている。前半部分に、御供衆、御部屋衆、足輕衆が書かれており、後半部分の足輕衆の中に「明智」と記載がある。この武将が明智光秀と考えられる（細川藤孝、後の幽斎も記載有）。

では、前半部分と後半部分では、

何がどの様に違ふかと言うと、もちろん、永禄六年、室町幕府十三代将軍義輝の役人名簿であるから、義輝時代の幕臣名簿である事は間違いないわけで、山科言継が書いた「言継卿記」、この日記の中で、永禄八年（一五六五）、義輝暗殺

時の幕臣一覧が前半部分に明記されて
いる。十数名が「永禄六年諸
役人附」と「言継卿記」の義輝暗
殺時に幕臣とされた人物と名前が
一致する。

では、名簿の後半部分はいつ書
かれたものか？ 後半部分が書か

れた日付はないが前半部分に書かれていた人物の中で、後半部分にも載っている人は一人もいない。

となると、義輝時代の物ではなく、その後の名簿である事になる。

「言継卿記」の永禄八年に記載されてある記事は、義輝が三好三

人衆に暗殺された事が書いてある
ので、前半部分に記されている幕
臣名簿は、將軍義輝と供に討ち死
にした人たちのものだ。

この点に関して、明智光秀の子
孫である「明智憲三郎」氏の説が
詳しく明確だと思う（明智憲三郎

著『本能寺の変四二七年目の真実』
）。

私も、この点に関して、全く同
感だ。

後半部分では、義輝の家臣とし
て討ち死にした人物が一人として
書かれていないので、義昭時代の

幕臣名簿と考えるのが自然。

十三代「義輝」は、能力の高い
將軍であつた様で、文武両道、戦
国大名に対しても自ら調停を行
うほどの人物で、劍の腕前は「塚原卜
伝」直伝と伝わる。後の十四代「

よしひや

義栄」(義輝の従弟)を將軍に擁

立しようとは画策した、松永久秀、
三好三人衆などが、義輝を暗殺し
ようと二条御所を襲った時には、
足利將軍としては、久方振りに自
ら剣を持って敵と戦った人であつ

たようだ。

勇猛果敢。刀を何本も用意し、多くの敵兵を切り倒したと伝わる剛の者であつたらしい。

義輝暗殺後、松永久秀らは義輝の実弟で、奈良「興福寺一乗院」の覚慶（後の義昭）を幽閉したが、

二ヶ月後には、義輝の近臣である一色藤長、細川藤孝などの手により脱出し、翌年二月に「足利義秋」（義昭）と名のる。

永禄六年諸役人附に明記されている幕臣の記述は、十四代義栄の時代の物ではなく十三代義輝と十

五代義昭の物である事が、以上の点からも読み取れる。

この記載は、非常に重要であつて、信長に仕えるまでの光秀の足跡に迫る事ができる。

明智光秀の菩提寺である「西教寺」、正式名称、天台真盛宗総本

山戒光山兼法勝西教寺。

聖徳太子が、推古天皇二六年に創建したと伝わる寺で、明智一族の墓がある。比叡山のふもとに位置する坂本の地にあり、今でも明智光秀の法要が営まれる。この寺の境内からは琵琶湖の美しい姿が

望める。眼下の先、琵琶湖の対岸には、近江富士（三上山）が見え、この眺めを光秀や利三も見ていたのだらう。この坂本の地を治め、丹波とともに善政を行つた光秀、だからこそこの地では未だに圧倒的な人気を誇る。領主がどの様な

政を行つたかを知りたければ、地
元へ足を運ぶと結構空気で感じる
ものがある。近くには坂本城あと
に作られた、坂本城址公園がある。

元龜二年（一五七一年）、織田
信長の比叡山焼き討ちの際に、西
教寺も災禍を被つた。

その後、坂本城の城主となった光秀は、西教寺の檀徒となり、復興に大きく力を注ぎ、総門は坂本城城門を移築したもので、鐘楼堂の鐘は陣鐘。

天正十年に、この世を去った光秀は、その六年前に亡くなつた内

室熙子や一族の墓とともに祀られて
いる。

松尾芭蕉が、元禄二年に詠んだ
句がある。

「月さびよ明智が妻のはなしせむ」
『寂しい月明りのもとですが、明
智光秀の妻の昔話をしましよ』、

光秀夫妻の仲睦まじさは有名で、
思い出話を一緒にしましろう。

この様な意味の句だと思いが、
芭蕉が奥の細道の旅を終えて伊勢
の遷宮参詣をした際、島崎又幻宅
に一泊し、その時受けた、又幻夫
婦の暖かいもてなしに、芭蕉は感

激して、この句を詠んだと言われ
る。

この話の元になるのが、明智の
妻、黒髪の伝説。

明智光秀が出世する前、貧しか
った頃に宴を催すお金がなく、集
まる人をもてなす料理の準備もま

まならない。

そこで妻は長く美しい黒髪を切り売ってその代金とした。その料理は他家のものより立派な食事で、光秀は面目を保った。という有名なお話。

朝倉義景に仕えていた頃の話と

されるが、そもそも私は義景に光秀は仕えていないと思うので、この話はやはり伝説だろう。

日本人は苦勞した後の出世話が大好きだが、室町幕府の幕臣として名が残る光秀ほどの武将がここまで貧困に喘ぐ事は考えにくい。

西教寺の境内には、この句の句碑がある。

芭蕉は、伊勢の神職で師職家であつた、島崎又幻夫妻の心温まるもてなしを受けて光秀の妻「熙子」(ひろこ)と思いが重なりこの句を詠んだのではないだろうか。

「あなた方のその心は、必ず報
いられる日が来ます様に」という
芭蕉の願いが込められている様な
気がする、素晴らしく心落ち着き
温まる感がする句である。

ちなみに、光秀の妻である女性
の正式な名は伝わっていない。

仮の呼び名で「熙子」とされている。「珠」は娘で、後の細川ガラシヤである。

明智光秀は、丹波での評判もすこぶる良い。いかに有能な領主であつたかがよく分かる。

天正三年（一五七五年）、光秀は信長に丹波攻略を命ぜられる。丹波攻略の拠点として、天正五年に「亀山城」を築く。天正七年にようやく、八上城を落城させ波多野氏を滅ぼす。

この時の有名な話で、光秀の母（

乳母説もあり）を人質に出し降伏を呼び掛けた命の保証をしたのに、信長は約束を守らず波多野秀治を処刑してしまい、光秀の母も処刑されたという話が今も伝わる。

またまたこの手の話が出て来る。どこまで信長をバカ殿扱いしたい

のだろうか？

この様な話の出所は、秀吉のまわりにいる連中のおとぎ話ばかりである。歴史ではない。

江戸時代も現代もそうだが、平和ボケの時代になると、この手の話がもてはやされる一種の都市伝

説の様なもの、当事者たちの功績や名誉を貶めて事実の価値を下げるばかりの話。

天正十年六月二日、本能寺へ向かう明智軍は、一日夜半に丹波亀山城を出立し老ノ坂を東に進み桂川を渡り京へ入る。それ以後、光

秀は丹波へ戻る事はなかつた。

元亀元年（一五七〇年）、織田信長は北近江の浅井、越前の朝倉連合軍に姉川の戦いでかろうじて勝利した。

しかしなおも浅井、朝倉連合軍の抵抗は激しく、宇佐山城を攻め、

森可成や織田信治を討ち死にさせている。

森可成（もりよしなり）とは、織田家においては柴田勝家よりも前から信長に仕えた古参組で、森乱丸（成利）の父である（蘭丸は間違い）。

家系は清和源氏系で、代々美濃に住み土岐氏に仕えた。明智光秀も土岐氏出身と言われている。

森可成は、槍の名手で、多くの武勇伝が今に伝わっているが、可成が手掛けた多くの文献が現存し、織田家の重臣として深く政務にか

かわっていた様子が見て取れる。

浅井、朝倉連合軍を近江に釘付けにする為に奮戦し、信長軍への急襲を防いだ。

信長はこの直後に、浅井、朝倉に合力した比叡山を焼き討ちにする。この時の信長の命令は異常であつ

て許されるものではない。

比叡山の寺社勢力は、敵対勢力であるから、戦のならわしで殺し合いになるのは仕方ない事だろう。しかし、坂本の町も焼き尽くし、比叡山に逃げ込んだ無関係な者まで一人残らず皆殺しとは、いかに

第六天魔王であつても悪魔の所業である事には変わりがないのである。

どうも信長心酔者たちは、信長の全ての行いの崇拜者であつて、良い事と悪い事を個々に分けて評価できない人が多すぎる。

江戸時代の学者で著名な、新井

白石も比叡山の焼き討ちを評して、
「その事は残忍なりと言えども、
長く僧侶の凶悪を除けり。これも
また天下の功有事の一つとなすべ
し」と、「読史余論」（とくしよ
ろん）の中で書いている。

新井白石も信長の功績を評価し

ていると、一般的には伝わるが、
さにあらず。よく読んでみると、

宗教勢力の一掃や天下統一の功績
は褒めているが、信長評としては、

「信長、天性残忍にして、詐力を
もつて志を得られき。さらば、そ

の終りを善く善くせられざりしこと、自ら取れる所なり。不幸にあらず」と書いてある。

つまり、「自業自得」と信長の最期を評している。明智光秀の謀反によって自害したのも、「君臣の義」を知らないからだと言罪し

ている。朱子学者らしい発想かも
しれないが、この評価はちよつと
厳しすぎる。

ここでもくどく再び述べるが、
この様な江戸初期、そして中期の
信長酷評は、関白秀吉による歴史
改ざんで、自分を正当化する為に

作つた勝者の歴史が伝わって居るに過ぎない。

家康は、自分の天下が回つてきた時に、秀吉路線に乗つかつている方が徳川、源氏、幕府などに都合が良かっただけで、名誉回復に尽力するほど、信長に恩義はない。

ましてや織田家に何の借りも無いはずである。ただし、明智光秀や斎藤利三には大きな借りがある。

本来、秀吉の情報戦に敗れたのは、家康も同じで、光秀や利三の出方次第では、家康自身が秀吉の的にされたかも知れない。

明智の一族に恩を返すとしても、首謀者であるので、おおつぴらにできないし、一族はほとんど生き延びていない。助かった血縁者も多くは行方不明であろう。

しかし、斎藤家の縁者は多くいた。

特に徳川家の重臣たちは、何度も利三とよしみを通じていたであらうから気心も知れ織田家家臣団が、恐怖や不安で耐えきれなくなっている事を感じ取っていただろう。

山崎の合戦後、明智方が崩壊して行く中、徳川勢は恐怖を感じた

事だろう。

秀吉の鬼神とも言える動きにより明智光秀は滅び、斎藤利三も捕われた。

徳川家にとって、信長を襲った一味としての扱いを受ける可能性もあるわけで、この後に織田家が

跡目争いを始めるまでは、固唾を
吞んで情勢を見守つて居たのかも
知れない。

斎藤利三が何も語らずに秀吉に
処刑された事に対して、後々徳川
家は、その一族への感謝をもつて
報いたのではないか。

それが、斎藤一族への恩義では
なかつたか。

背景

朝廷は、「三職推任」など、信長の征夷大將軍、関白、太政大臣の任命問題に直面していた。

天正十年（一五八二年）、勸修寺晴豊、武家伝奏の日記「晴豊公

記」に、天正六年四月、右大臣兼右近衛大将を辞官して後、無官の信長に官位を与えるべく奔走する姿が見て取れる。武家伝奏勸修寺晴豊が、京都所司代村井貞勝邸を訪れて交渉していた様子が日記に残されている。

この時期の信長は、最大の脅威であつた武田氏を滅ぼし、残るは四国の長宗我部氏、中国の毛利氏、九州の島津氏。越後上杉氏ですら時間の問題であつて、信長にとつては一番落ち着いた時期であつたろう。

今に残ってはいないが、もうこの頃には、信長が中国大陆を目指す明確なビジョンを描いている事を、重臣たちには告げていたと考えられる。

天才信長の考えるプランは家臣団にもほとんど理解されず、また

信長も理解させようともしなかつたのかも知れない。

説明しても理解されないと思うのは、「天才型」の典型で、やはり彼の取り巻きは部下であつて友では有り得ない。

秀吉や家康の様に、自分に苦言

をも言ってくれぬ参謀が居ないのが天才型の特長でゆえに長期政権にはなりえないのだらう。

限界点は、大坂本願寺（石山本願寺）の問題が解決した、天正八年（一五八〇年）以後に始まる信長の恐怖の肅清を見た時で、全て

の家臣たちが、何かあれば次は自分たちの番である事を感じ、秀吉や光秀、勝家などですら度肝を抜かれ精神的にはさぞ辛い日々を送る事になったと想像できる。

この時期に突然追放された佐久間信盛は、信長の父である信秀の

代から仕えた最古参の家臣で、織田家の家督争いで、弟の信行が、謀反を起こした時でも信長を支援し「退き佐久間」（殿軍の指揮を得意とした）と異名を持つほど優秀な武将。

林通勝、安藤守就、丹羽右近ら

を追放し、光秀、秀吉、滝川一益ら、新たな家臣団を形成して行く。

この将来有望な家臣団ですら、心の中では、先の見えない不安を常に抱えているのは間違いない。

信長の描いている構想では、日本国内は明らかに織田家直轄地の

拡大への流れを加速させている。

信忠、信雄、信孝、すでに二十代半ば、国内は息子たちに任せて、信長自身は海を渡り、中国大陸へ乗り出す大構想があつたとも伝わっている（ルイス・フロイス著『日本史』）。

後に秀吉が、文禄、慶長の役で、明軍と戦う事になる事でも、信長時代の構想にそつたものと考えられる。秀吉には信長の大構想の本質までは理解できていなかったと思える。

信長が目指す中国大陸進出構想

で私が感じるのは、朝廷対策にも利用できたのではないだろうか。

天皇をどうするか、この事についてヒントがある様に思う。国内を息子たちを中心にした家臣団に任せて、自分は大軍を率いて明と対峙する。中国大陸へ進出し日本

国外へ領地を求めた場合、そこに君臨する信長はどの様に扱われただらう。きっと中国皇帝と呼ばれ日本国をも治める王として扱われるだらう。そうなれば、朝廷の権威、天皇の立場は国内に限定されてしまい、もはや信長の敵ではな

くなる。日本国内ではおさまりきらない信長。そう考えると、全てが見えて来る様に思える。

信長政権は、順調に拡大したのではない。今川義元との桶狭間の戦いなどは、草創期の話で、天正年間においても、状況は一進一退、

とても「天下布武」が順風満帆ではなかつた。

朝倉氏との戦いを経て、浅井氏を滅ぼしたのを皮切りに、長島一向一揆平定、そして、長篠の戦で武田勝頼に勝利。越前一向一揆平定。

しかし、天正三年には、丹波黒井城主、赤井忠家離反。天正四年には、丹波八上城主、波多野秀治の離反。石山本願寺からの攻撃。

木津川口の戦いで、毛利水軍に大敗北。紀伊雑賀一揆との戦い敗北。加賀手取川で上杉軍との戦い

での大敗北。松永久秀の離反。天正六年、播磨三木城主、別所長治の離反。摂津有岡城主、荒木村重の謀反。そしてこれらの勢力との戦いと勝利。一向一揆平定、伊賀、紀伊一揆の平定。武田勝頼の敗死。

この時点でようやく、信長政権

の未来が大きく開けた事となる。
上杉、毛利、長宗我部、島津も時
間の問題と成りつつある時期だっ
た。

この時点で、朝廷側も將軍義昭
も絶望に近い恐怖を味わった事だ
ろう。しかし、火種は信長の足元

にいつも転がつていた。

頻発する謀反は、將軍義昭や毛利氏、本願寺などの働きもあつたであらうが、やはり大魔王への恐怖、不安がそうさせたのではないだらうか。

「栄達か没落か」、常にどちらら

かしかない消耗戦。限りなく続く論功行賞。息をつく間もなく続^くご奉公。疲れる身体、折れる心。

もはや、大魔王「信長」を受け止める事がこの国では出来なかつたのではないかと思う。

本能寺の変は、起こるべくして起

こつた。結局、時代の寵児は天正十年六月二日までが、天命だったのだろう。

個人的には、その後の信長政権を見てみたかったと思うが、その場合、ひよつとすると今の日本国は存在しないかも知れないし、逆

にユーラシア大陸の各地で、日本文化が花開いていたかも知れない。しかし、信長は時に敗れたのだ。

先ほども少し触れたが、信長が大陸へ進出した場合、日本国内における朝廷の権威は薄まるだろう。私の考えでは、皇位篡奪や、征夷

大將軍などに興味はなかつたと思
う。

信長にとって、天皇家は象徴的
なものに過ぎず、天下布武を實行
するのに何ら障害にならない。

では、將軍はどうか？

これは少々厄介なもので、武家

の棟梁であるから、毛利を片づけた後で、義昭には完全に引導を渡すつもりではなかつたか。

では、義昭を排除し、室町幕府を完全に消滅させた後をどうするか？

信忠にでも征夷大將軍を拜命さ

せて、織田一族が武家の棟梁である事の形は整えたかもしれない。

幕府を開いたとは思わないが、信長自身は大陸にあつて、領土拡大し続けて、中国皇帝のような存在になり、広大な領地を治める大王になつて居たかも知れない。武

力人材、政治力など含めて、信長の可能性は非常に大きく、信長の夢を想像するだけでも心躍る。

ここで少し考えて欲しい事がある。

よく聞く話で、征夷大將軍になる為には、源氏出身か、はたまた

源氏出身を名乗らないとなれない
と思ひ込んでゐる人が多いのだが、
さにあらず。源氏、平氏、どちら
でも良いのである。もともと征夷
大將軍になるには源氏出身が資格
である様に考える方が多いがそう
ではない。

織田家は平氏を名乗っているが問題ないし、実はご存じの通り、実権を握ってしまえば、誰でも源氏を名乗れるので、この議論自体が無駄である。

話は逸れるが、もし源氏や平氏の出身者が皇位を篡奪した場合、

これは易姓革命になるのだろうか？

例えば、室町幕府三代将軍「義満」が、皇位を篡奪し天皇を名乗ったとしよう。

これは、中国などでよく起こった「易姓革命」にあたるのである。

うか？

血統の断絶ではなく、徳の断絶を意味するのであれば、易姓革命だろうが、血縁的にはどうなのだろう？

桓武平氏や清和源氏、村上源氏など。

臣籍降下した段階で、血縁なし
と考えるのだろうか？

では、継体天皇はどうなるのだ
ろう？

応神天皇五世の子孫？ 万世一
系のはず。

それならば、平将門が「新皇」

を名乗り乱を起こした時、もし皇位に付けば、桓武天皇五世の子孫なので、篡奪にはならないのだからか？

話がそれ過ぎたので話を戻すが、征夷大將軍になれたかどうかなどの議論は的外れで、信長の統治能

力はどの様な思考だったのかを考えない、島国特有の歴史観から
は抜け出せないのではないだろう
か。

恐怖と不安

浅井長政の半生について詳しい事はここでは省くが、この時代、浅井氏は六角氏との戦いなどで苦慮する時代が続いていた。

その様な折に、織田信長は、浅

井家に対して同盟を持ち掛けた。

信長にとって、美濃斎藤氏との戦いを有利に進める為にはどうしても浅井氏との連携が必要であった。信長の思惑として、近い将来避けられない戦い、朝倉氏との激突を想定した上で、どうしても長

政は必要な武将であつたのだらう。

「朝倉氏」と「織田氏」の関係

は、信長より遙か以前から、相いれない関係で、この時代にはもはや激突は避けられない状態。ただ、朝倉氏にとって不運だつたのは、織田家の当主がこの時代に信長で

あつたと言ふ事だろう。朝倉氏と織田氏は、元々共に守護である斯波氏に仕える臣下であつた。

格は朝倉の方が上で、斯波義統が、天文二十三年（一五五四年）に守護代の織田信友によつて死に追いやられる事件が起こる。

嫡子の斯波義銀は、織田信長を頼り、救いを求めた。

信長にとっては、信友は織田家本家で主君筋であるが、守護斯波氏に反逆した守護代信友を攻める絶好の理由が転がり込んだ。織田家をまとめる最大のチャンスであ

るし、主家である斯波氏でさえ踏み台にできる機会が訪れた。

信長が逃すはずがない。

さらに信長は、一時的に所領の全てを斯波氏に返上するが、その内に有名無実となり全ては信長のものとなった。

この斯波氏とは、本性は源氏で、清和天皇の血をひく清和源氏である。室町時代以降は、斯波氏と称するが、それ以前は足利氏を名乗っていた。本来は足利宗家筋であって、日本の武家の中でも名門中の名門である。

朝倉氏にとって織田氏に対する
思いは格別であつて、相いれる事
は絶対に許されないのではないか。
しかし、朝倉氏最後の当主、第
十一代「義景」は、室町幕府十五
代将軍、足利義昭を越前一乗谷に
迎えて保護したが、何故か義昭の

命に従わず上洛をしない。

この時の義景は何を考えていたか？ 今となつては分からないが、信長という人物に対しての評価を誤り、一乗谷から出て京に上る発想もなく、朝倉家や自身に迫る危機に鈍であつた。

さて、浅井長政である。

朝倉氏との深い関係もあるだろうが、取りあえず信長と同盟を結んだ。この事実を見ても、よく言われるような、朝倉氏との関係が長政を裏切らせたと言う、そう単純なものではなさそうだ。

元龜元年（一五七〇年）四月、
信長が長政の裏切りにあい、挟み
撃ちにされた金ヶ崎の戦い。越前
の朝倉義景領に侵攻した、織田徳
川連合軍は、金ヶ崎城を落とし朝
倉軍へ圧力を強めた。

織田徳川連合軍は、「言継卿記」

によると三万の大軍勢、その他に松永久秀や池田勝正など近畿の武将も従軍している。

このタイミングで、長政が信長を裏切り、背後から襲いかかった。

ここであの有名な「お市の方」（信長の妹）が、両端を紐で縛っ

た小豆袋を信長に届けて長政の裏切りを知らせたという逸話がよく知られており、未だに映画やドラマでも採用される事があるが、俗説と断定して問題ない。

この様な小事で雌雄を決する戦いにはならないし、お市の方の行

動は、信長との関係、長政との関係からみてもおかしい。

長政は何故に信長を裏切ったか？

朝倉氏を攻めないと約束していたが、信長がそれを破ったから、朝倉氏を救援する為？

朝倉攻めの折に、事前の相談が無かったからか？

どうもそうではないらしい。

長政にとって信長を倒す最大のチャンスが訪れたと考えたのではないか。戦国武将らしくチャンスを見落とさなかつた。ひよつとす

ると長政の預かり知らぬ出来事だったのかも知れない。

と言うのは、もし私が最初に記した信長を倒す最大のチャンスと考えるには、攻めのまずさが目立ち過ぎるし、長政自身の顔が見えない。戦いに参戦している様子が

ないのである。

長政にとって、この時点では十分に信長の偉大さ優秀さ、そして残忍さは理解していたはず。

ならば、ここは命懸け。生涯一度のチャンスとして全軍で事に当たらねば取り逃がす。

長政や浅井軍の主だった武将たちの動きの記録が乏しく、存在が見えない。

そして取り逃がした。

そこで私の結論としては、長政は信長への奇襲を知らなかつたのではないだろうか？

長政が計画したにしては余りにもずさん。言われているほど、信長はピンチでも何でもなかった。

織田徳川連合軍の被害が大した事はなく、後続部隊が不意に襲われたので、安全の為に信長を急ぎ逃がした程度であった。

よく映画で見る処の、アメリカ大統領が一発発砲されただけで、シークレッツトサービスたちが何が何でも安全なところまで一切事情を顧みず脱出する様な事であろうか。

なぜそう思うかと言うと、この

話もまた秀吉伝説に引きずられて
いるからである。

有名な話で「秀吉、金ヶ崎殿軍
伝説」がある。

実際は、池田勝正率いる部隊が
浅井急襲部隊を防ぎ、明智&徳川
部隊がこれを援護した。後に信長

は、この時の殿軍の功績に対して褒美を出しているが、記録に残るのは秀吉へのものだけである。我々は、秀吉の作った歴史を、またまた刷り込まれているのではないか。この点には家康の罪も大きいと思われる。

天下が徳川に移った時に家康は、秀吉の改ざんした歴史や、信長に對する秀吉がちりばめた嘘など、事実と異なる事を検証し修正すべきであるのに、家康自身が後味の悪い権力奪取を行つたものだから、徳川家に余り影響の無い所には目

をつむりお構いなしとした。その結果、戦国末期の信長の時代において資料的にも混乱し、事実が見えにくくなつてしまつてゐる。

長政に話を戻すが、金ヶ崎で織田徳川連合軍に弓を引いたのは、長政ではなく、隠居の身である父

「久政」とその配下の者たちではなだろうか。

浅井家が朝倉家への義理立ての為に信長を裏切る。このような事は戦国の世で原因の一番手として語られるのには違和感を覚える。

同年六月には、「姉川の戦い」

が起こる。

織田徳川連合軍と浅井朝倉連合軍が、姉川を挟んで睨み合う。

金ヶ崎の戦いより二ヶ月しかたっていない。

私はこの時の信長の怒りを強く感じるし、先程の戦いでいかに織

田徳川連合軍の被害が少なかつたかが時系列でも明らかだと思ふ。

浅井朝倉連合軍もよく戦つた。

しかし結果は、信長の勝ちである。

この姉川の戦いで、浅井朝倉連合軍は壊滅し、信長に敵対する事はもはやできないと思つておられ

る方が多いのだが、実は勝負はこれからであつて、信長自身、天才&魔王ぶりをここから十二分に発揮する事となる。

姉川の戦い後、反信長勢力は一層の危機感を持ったに違いない。

本願寺勢力、武田信玄、上杉謙

信、毛利、三好、そして延暦寺。

今までになかった、延暦寺勢と本願寺系一向宗との連携。

同年八月（姉川の戦いの二ヶ月後）、野田城、福島城の戦い。

三好三人衆はしぶとく信長に対抗すべき機会をうかがっていた。

この時、三好三人衆が兵をあげたのは、大坂本願寺勢（石山本願寺）との連携が見込めた事と、それに乗じて、浅井朝倉連合軍も信長の防衛線に襲いかかる約束ができていたからである。織田軍包囲網が出来上がりつつあった。

(注：三好三人衆とは、三好長逸、三好政康、岩成友通の三好氏一族、重臣の事)

信長絶体絶命のピンチ。

しかしこの時はまだ、將軍義昭は信長の味方であつた。

なぜなら、三好三人衆が居たからである。

兄である、十三代将軍「足利義輝」を殺した張本人たちで、義昭自身も何度も殺されかけた不倶戴天の敵である。

信長には、つきがあつた。

義昭には大局が見えていなかっ
た事。義昭自身の本当の敵は誰な
のか、やはり不徳の致すところな
のだろう。

信長は、全部隊に退却命令を出
し、將軍義昭と共に京へ退き、態
勢を立て直そうとした。

義昭の限界なのだろうが、この時点では三好三人衆と手を組む事はできなかつた。

しかし本願寺の顕如には和睦を求めらる。どうも、顕如に対して義昭は、共鳴するものがあつたのではないか。

信長は、義昭を利用し、朝廷工
作をし、正親町天皇より、「講和
斡旋を希望す」との言を得て、同
年十一月に各勢力で話し合いの場
がもたれて、十二月に和睦が成立。
浅井、朝倉、六角連合軍も兵を
引く。

元龜元年は、信長にとつても凄まじい一年であつた事だらう。

比叡山、本願寺勢を敵に回した事で、信長の様子が少し変わる。

元龜元年、信長の弟、信興が長嶋の地で戦死し、織田軍は敗走している。

翌、元龜二年（一五七一年）五月に第一次長嶋侵攻、柴田勝家や佐久間信盛らに、兵五万を与え、長嶋へ送り込んだが、雑賀衆や門徒宗などの反撃にあい、一揆勢の攻撃に耐えきれなくなり、退却する事となった。また長嶋の地で敗

北を喫する。

尾張側から攻め込んだ佐久間軍は速やかに兵を退く事ができたが、伊勢側から攻めていた柴田軍は撤退に手間取り、一揆勢の猛攻を受けて大損害を出した。

信長は同年九月に比叡山を焼く。

近年の発掘調査で判明した事は、全山を焼きつくした様な壊滅作戦では無いようである。場所も期間も限定した作戦であつたようだ。

しかし何度も書くが、僧兵はいざ知らず、里の坂本などからも戦火を避けて避難して来ている女子

供など武器を手にしていない者ま
で殲滅する事は断じてない。比叡
山での皆殺しなど絶対に必要ない
のである。

歴史作家の井沢元彦氏なども、
信長の功績お陰で、僧兵が暗躍し
なくなつたなどと書かれているが、

秀吉が後に行う「刀狩」のような制度を強権的に行えば、武器を持つ事を許される者たちを限定する、江戸時代のような武士の世の中は作れたはずである。信長がその気になれば武士以外の者が武器を持つてなくする事など、雑作もないは

ず。

比叡山の勢力は、ここに壊滅した。

この事により、浅井朝倉連合運は最大のピンチをむかえる。

元亀三年（一五七二年）七月、織田軍は北近江に進軍し、浅井家

への攻撃態勢を整えた。

長政は、同盟者である朝倉家に援軍を要請し、義景は一万五千の兵を率いて近江に駆けつけた。

両軍、なかなか本格的な戦闘にはならず、こう着状態が続いていたが、織田軍は数で勝り、浅井朝

倉連合軍を圧倒していた。このままでは、浅井、朝倉両家の滅亡は時間の問題であつた。

ところが、思わぬ味方が現れる。

足利義昭である。彼は、一昨年に信長の大ピンチを救っているが、今度は信長包囲網を築きあげる為

に、武田信玄を動かした。

將軍義昭は、信長の本性にやつと気付き、何とか信長を除きたいと思う様になる。

信玄は、將軍義昭の要請に応え、甲斐の地を十月に出立した。

この時、信玄は長政へ書状を送

り、「只今出馬候この上は猶予な
くてだてに及ぶべく候八幡大菩薩、
富士浅間大菩薩、氏神新羅大明神
照覧、偽りにあらず候、義景と相
談せられ、このとき運を開かるべ
きてだて、もつとも候」

この決意の凄まじさ！

この時、戦国最強軍団が出陣した。織田軍はその知らせを聞いて震え上がった事だろう。家康は策をめぐらせた。

信玄は三方ヶ原で、織田徳川軍を簡単に撃破し西上作戦を続ける。総勢、三万人とも言われる武田軍

は、武田氏が動員できる最大兵力であり、甲斐の国の守りに残す兵は、ごくわずかな数だろう。

この様な大遠征ができたのは、北条氏との同盟もあるだろうが、上杉謙信とも相当なレベルで意思疎通はできていたのではないだろ

うか。

もちろん、將軍義昭の努力もあったろうが、信長の勢い、織田家の台頭がもはや黙認できるレベルではなくなつたのだらう。

それと、前年の比叡山焼き討ち。

この魔王信長の所業により、天台

座主の覚恕法親王が甲斐の国へ亡命している。

覚恕法親王は、正親町天皇の弟であり、信玄は法親王を保護し、自らは権僧正という高位の僧位を与えられた。覚恕法親王は、信玄に仏法の再興を懇願した。

さすがの信長も、この時ばかりはかなり焦った事だろう。できるなら、戦いたくない相手の最高峰である最強武田軍が、よき同盟者の家康を簡単に打ち破り近づいて来る。

この時の信長包囲網は、大坂本

願寺、顕如の存在が大きい。

「信長に対して戦いに立ち上がらぬ者は破門に処す」と、諸国の門徒に檄を飛ばし全面对決に突入している。

浅井朝倉連合軍、三好三人衆、松永久秀までが、義昭の要請を受

け入れ、信長に反旗を翻す。

浅井朝倉連合軍で、信長軍を北近江に釘付けにし、その間隙に武田軍が西進し、美濃の織田軍と対すれば、武田軍は各個撃破しながら進む事が可能で、そうなれば信長は後退せざるをえない。

美濃を突破された段階で、摂津衆などを始め多くの武将が織田包囲網へ参加するであろうから、信長は風前の灯火状態。

しかし、この時点ではまだこの国は、信長を必要とした。

同年十二月、朝倉義景が兵をひ

いた。浅井領の北近江に布陣して
いた義景軍が、兵の疲労と積雪な
どを理由に越前へ帰国してしまっ
た。

浅井長政は執拗に止めた。

武田信玄は、義景の独断に激昂
し再出兵を促す手紙を送った。

「以使僧承候条、得其意候、仍
二俣之普請出來候間、向三州陣
之砌、家康出入數候之条、去廿
二日当国於見方原逐一戰、得勝
利、二遠両国之凶徒并岐阜之加
勢衆千余人討捕、達本意候間、
可御心易候、又如巷説者、御手

之衆過半歸國之由驚入候、各勞
兵勿論候雖然、此節信長滅亡時
刻到來候処、唯今寬宥之御備勞
而無功候歟、不可過御分別候、
猶附與彼口上候、恐々謹言」

拾弍月廿八日

信玄

花押

謹上

朝倉左衛門督殿

「伊能文書」

簡単に訳すると、使いの僧より話は伺った。二俣城の普請がなり三河に出陣した所徳川家康が出兵して参り、去る二二日三方ヶ原において一戦交え勝利。三河・遠江両国の軍勢及び織田方の加勢千余

りを討ち取り、本意を達したので
ご安心頂きたい。

処で巷で聞いたのだが、貴殿の
兵の大半が帰国した事に驚いてい
る。兵をいたわるのは当然だが、
信長を滅亡に追いやる好機が到来
した時に、そのような寛容な備え

でいても、労あるのみで功などは無い。判断を誤る事なかれ。なお、使者に口上を与えたので聞いて頂きたい。恐々謹言。

おおよそ、この様な内容である。しかし、義景は再出兵に応ずる事

もなく黙殺した。

信玄は義景の出兵を待っていた、朝倉軍が動かなければ、織田軍とまともに決戦となつてしまふ。

今度は信玄が焦つた事だろう。

元龜四年（一五七三年）二月には、進軍を再開し、徳川領の三河

野田城を攻め落とした。

しかし、巨星墜つ。

信玄もまた時に召された、四月の事であつた。

信玄の急死により、武田軍は甲斐へ引き上げた。信玄を失つては、仕方がないであろう。

そうなると信長の動きの速さは天
下一。元龜という、信長にとって
は縁起の悪い年号を、天正元年（
一五七三年）と改めさせて、七月
には三万の大軍を率い、再び北近
江を攻め立てた。

浅井長政は堪らず、朝倉義景に

援軍を要請、義景は二万の軍で即座に駆けつけた。

しかし、もはやこの時の織田軍には、武田軍の脅威はなく、三万といえども戦意の高さが違った。

義景はやむなく越前へ撤退を始めたが、織田軍はこの時を待って

いた。逃げる朝倉軍を徹底的に追撃し、ついに「二乗谷の戦い」で、朝倉氏を滅亡させた。

朝倉軍を壊滅させた織田軍は、今度は速やかに浅井軍へ襲い掛かり、一方的な戦いで長政を追い詰め、遂に本拠の小谷城が囲まれる。

織田軍より、羽柴秀吉などが降伏を勧める使者として、何度も交渉を続けたが、長政の意思は固く、お市とともに娘たちを信長の許へ送り、父久政と共に自害した。

同年九月、長政享年二九。

もし、武田信玄の寿命があと数

カ月ほど長ければ戦況は変わったか。

勝手に撤退した凡庸な朝倉義景でも、長政の要請で再度出陣して来るわけであるから、信玄が七月まで生きていれば、再度強固な信長包囲網が完成していたはず。

朝倉軍が再出陣してきた段階で、各方面で戦鬪開始であつたと思う。こうなれば流石の織田軍も各個撃破され、兵力は削り取られるだけで、信長は落ち延びるしか助かる道はなかつたのではないか。

織田軍がこの時少しでも劣勢に

なれば、動きの鈍い毛利も黙って居ないだろうし、長宗我部も将軍義昭に付くであろう。

反信長の態勢ができてしまおう。

織田軍が減びるべきだったと言っているのではない。信長はこの時最大のピンチであって、敵対勢

力は、將軍義昭を筆頭に、信玄、
顯如、長政、義景、その他大勢。

信玄の寿命は、信玄自身の運命
ではあるが、天が信長をまだ必要
とした為にここが天命であつた。

この時信玄は天に召された。

この後、信長も光秀にも天命は

下される。

浅井長政に付いて、もう一つ触れておきたい事がある。

有名な「髑髏盃」。

浅井朝倉を攻め滅ぼした後に、髑髏の盃で酒を飲んだという話。

伝えられる処によると、信長は、

天正二年（一五七四年）の正月、

四カ月前に滅ぼした朝倉義景、浅井久政・長政親子の頭蓋骨で作った三つの盃に、なみなみと酒を注ぎ、震え上がる家臣たちにその盃で酒を飲む事を強いたと言われる。これは事実ではない。

「信長公記」には、確かにその正月の宴に、義景、久政、長政3人の頭蓋骨が出されたと記録されている。

ただし、それを盃にして酒を注いだとか、飲んだという事は記されていない。

記録には「三つの頭蓋骨を薄濃にしたものが、公卿（お膳）に据え置かれて出てきた」とあるだけ。

「薄濃にする」とは、漆を塗って金粉で塗り固める事で、要するに三つの頭蓋骨は盃ではなく、一種の正月飾りとして宴に出されたの

だ。

戦国時代、敵将の髑髏はめでたい勝利のあかしだった。信長公記によると、その後祝宴は飲めや歌えの大盛況のうちに終わったと記されている。

敵将の髑髏に装飾をし、飾る事

は、自軍への賛美と敵武将への敬意の表れである。

信長の近習

確認して頂きたい点がある。

申し上げている通り、信長が宿泊している本能寺を含めて、京の都は警備が手薄などではなく、日本国中の中で最も安全な場所。だ

からこそ、光秀や利三は機を見たのであつて、この点は、信長の落ち度ではないだらう。

嫡男信忠は手勢とともに本能寺の近くに居る。では、信長自身の手勢はどうか？

信長には、小姓と言われる者た

ちが周りを固めている（小姓衆）。決して子供や未熟な部下ではなく、二十歳を超えている者も多く居た。親衛隊の様なものであるうか。

そして、「馬廻衆」、信長の時代でも、小姓衆よりも、馬廻衆の方が身分は上のようだが、馬廻衆

は嫡男が継ぎ、小姓衆は次男や三男、それ以外の叩き上げが多いようである。

有名な前田利家は、小姓衆から馬廻衆へと昇格した代表的な存在であろう。

この小姓衆を侮ってはいけない、

なぜなら彼らこそ最も信長の傍で仕え、日常を供にするのである。信長の小姓衆と馬廻衆の立場は、往々にして逆転している。

さらに、信長近習には「同朋衆」も居る。

頭を丸めた僧体の者たちで、常

に信長の近くに控える。

右筆はもちろん傍に居るし、強力な「奉行衆」も存在する。

ここで、信長勢力を整理したいと思う。

時代は少々、前後する面もあるが、信長配下で、トップクラスは、

単独で一方面軍を指揮する事を許された面々。

先ず、柴田勝家、明智光秀、羽柴秀吉、滝川一益、神戸信孝（織田信孝）、佐久間信盛。佐久間は、大坂本願寺（石山本願寺）攻め後、追放されるが、本来は処分される

立場ではない（降格や隠居はあつたろう）。

横道に逸れるが、この滝川一益も不思議な武将である。

この地位にありながら（実力なくして信長配下でこの地位にはのぼれない）、本能寺の変で信長亡

き後は、連戦連敗している。これほどの武将でも、信長の後ろ盾がないと凡庸になつてしまふのか。

信長とは、配下の武将に実力以上の力を出させたのか。

これも、恐怖政治の一環だろう。信長は、この点に気が付いてい

ない。天才に有りがちな、配慮に欠けた点だろう。

話を戻すが、この六人を助ける遊撃軍の司令官が、丹羽長秀、池田恒興、蜂屋頼隆、九鬼水軍の九鬼嘉隆などで、信長の命で連合軍となる。

次は「与力」。

信長軍の中で与力の定義は難しい。

佐々成政や前田利家は理解しやすいのだが、細川藤孝や筒井順慶となると、一国を支配する者であって、一般の武将とは格が違ふの

で、注意が必要である。信長の命により、目的によつては遊軍として、または配下の武将として敵地へ向かう。

本能寺の変時に、信長の近くで戦えたのは、近習の一部の者たちのみであつた。

この時期既に、反織田勢力は京
周辺に存在しない。したがって、
京の都は信長にとって安全地帯の
はずであつた。嫡男「信忠」が率
いる、二千以上の兵にしても、老
の坂から桂川を渡つて来る光秀軍
が予定外の行動であれば、知らせ

を聞きつけて、信長を逃がす間の
み奮戦すれば良いのであつて、京
に入る道は狭く、十分に時間を稼
ぐ戦いはできたはず。

何度も申し上げているが、予定
の行動であつたが為に誰も異変に
気付かない。

それが真実ではないだろうか。

別所や荒木の離反

別所長治。全国的には無名なの
かもしれないが、信長、秀吉を敵
に回し、壮絶な戦いを挑んだ男。

私は神戸生まれ神戸育ちだが、
この時代で言うところ、摂津の国生まれ

れ、播磨の国育ちである。神戸市須磨区で生まれて、垂水区塩屋で育った。塩屋と須磨の間に、境川という小さな川があり、それが境界線で摂津の国と播磨の国の国境になっている。

この小さな川は今も存在するが、

地元の者ですら、その存在をほとんど知らない。

江戸時代に、松尾芭蕉がこの地を訪れて、「蝸牛 角振り分けよ 須磨明石」と詠んだ。一六八八年、芭蕉四五歳の時のものである。

芭蕉の句碑がある辺りは、須磨

浦公園となつていて、春は桜の名所で、景色は瀬戸内海を一望できる緑豊かな場所である。

古くは、源平の古戦場であつた一の谷も近く、敦盛塚はすぐ傍にある。古より多くの武士たちの血が流された土地である。

話を戻そう。

別所氏の話だが、今の三木市にあたる国の領主であり、三木地方以外では評判を聞く事も少ない。

ところがである、神戸市西区にもこの時代の言い伝えは多く、三木攻めの秀吉軍と戦った名残が、

あちらこちらに残っている。

衣笠城などは、山の頂きに石碑しか残っていないが、勇猛果敢に戦った別所軍団を思う事ができる。

勝てば官軍で、その後の歴史に住まう我々には、もしもとか、たれば、などを思うと自身の存在

を否定するのかもしれないが、あ
の時、毛利家が一大決心をし大決
戦を挑めば、事態は大きく変わっ
ていただろう。

結果的に信長には勝てなかった
のかも知れないが、その影響で本
能寺の変が起こらなかつたのでは

ないかと思いをはせる。

その後の信長を、是非見てみた
かった。

別所長治は、当初、織田方へつ
いた。天正五年（一五七七年）、
織田信長が中国攻めを始めると織

田氏に味方し、中国方面司令官の羽柴秀吉に従い、播磨の諸将を説得し織田方へ付かせた。しかし翌年の天正六年（一五七八年）に、再び毛利攻めの命を受けた秀吉が軍を起こし、加古川城にて播磨の諸将を招き軍議を開いた時に、長

治は叔父の吉親を派遣した。

別所吉親は、毛利氏に与する一派であつて、別所氏内部も分裂していたのだらう。

しかし、城主「長治」が、自分の代理で秀吉の軍議に行かせるといふことは、この時点で長治の腹

は決まっっていて、毛利氏へ寝返ることは既成の事実であつたのではないか。

長治は信長という人物をよく知らないであろうから、この時点の判断は、毛利氏の力と、それに対する秀吉の人物を照らし合わせた

判断なのかも知れない。

不思議なのは、この時期、織田家の勢いは増して、信長が抱えていた各方面の危機はすでに過ぎ去っている。

武田軍に対しては既に、天正三年に、「長篠の戦い」で勝利して

いるし、松永久秀は、天正五年に「信貴山城の戦い」で討伐している。秀吉の軍師である竹中半兵衛もまだ健在であるし、地元の黒田官兵衛も傍に仕えて居る。そして、秀吉の最強ブレーンである弟、羽柴秀長も播州に居る。そんな中で、

本当に毛利頼みで反旗を翻すのだからだろうか？

確かに、荒木村重までが離反し、摂津の国に拠点ができ、花隈城（神戸元町）から、三木城へと補給路は確保できた。

しかしこれも一時的な事で、常

に毛利氏は中途半端な出兵しかせ
ず、尼子勝久の上月城を攻略する
も、またまた毛利勢は、それ以上
東へ進まない。

余談だが、この時に尼子氏と運
命を共にした武将に、山中鹿之助
が居る。正しくは山中幸盛、通称

は「鹿介」。後の世に誤って伝わり鹿之助と呼ばれている。

講談などで知られる「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」と三日月に祈り御家再興を願ったと言われる人物もこの時、毛利側に捕われて、殺されている。

この間、秀吉軍は毛利側に与する支城を次々と攻略して行く。

別所軍は、毛利軍と何度か連携するが、事ごとく秀吉軍に叩かれる。

有岡城に籠る、荒木村重に対して、秀吉の武将となっていた、黒

田孝高（官兵衛）が説得に向かうが、村重側の捕虜となり幽閉されてしまう。この時信長は、孝高が裏切ったと思いい人質として預かっていた嫡男長政（筑前福岡藩の初代藩主）の処刑を命じたが、秀吉配下の武将、竹中重治（半兵衛）

の機転で一命を救われたとしてい
る。

この話の出所はどこだろうか？

またまた、信長を貶めようとす
る秀吉の右筆あたりの文芸作品か
らだろう。

戦いの最中に、重要な交渉に出

向いた秀吉配下の武将の一人が戻
つて来なければ、普通、大将は何
事を心配するだろうか？ すわ、
殺されたか！ こう思うのではな
いだろうか？

どのドラマや映画を見ても、竹
中半兵衛の機転と秀吉の懐の深さ

を表現するが、こう言う非常識な部分はよく検証しないといけない。

何度も言うが、これでは信長はバカ殿で、秀吉の情報操作にまんまと乗せられているだけなのである。作品としては面白いだろうが、私には秀吉という男が心底恐ろし

く思える。

天正七年、十月に宇喜多直家が毛利氏を裏切り秀吉へ付いた。もちろん織田勢力へ下ったのだが、私はあえて秀吉に属したとみる。

そして、この時から秀吉は毛利側へ触手を伸ばしていたのではな

いか。秀吉と毛利側の和睦の様なものは、我々が思うより遥かに早い段階から始まっていて、双方の資料が事実を上手く隠してしまっている。

ともかく、天正七年十一月には、荒木村重の有岡城が落城する。村

重は、それより前の九月に、尼崎城へ一人で逃げたとされる。

信長は、降伏し尼崎城と花隈城を明け渡せば、妻子を助ける条件を出したとされるが、村重は応じなかつた。

例のごとく信長の残忍性が顔を

出す。

百人以上が尼崎で惨殺され、京に送られた村重一族と重臣の家族、三十数名が市中を引き回された後に、六条河原で斬首された。

その様子を、立入宗継は、「かやうのおそろしきご成敗は、仏之

御代より此方のはじめ也」と記している。

荒木村重一族などへの残忍な処分は、信頼できる書物に多く記されておられ、信長の行ってきた所業とも方向性が合う。

信長は天才だが、心に大きな病

を抱えていたのではないだろうか。

私が言いたいのは、この場合でも必要以上に人を殺しているし、殺し方も余りにも残忍であるが為に、味方であるはずの織田勢への薬が効き過ぎている。それは、不安と恐怖以外の何物でもない。

信長は寛大な面や心情に配慮する面も多く見せるのに、病的な発作的行動も多くある。

村重自身は、生き延びて、花隈城から毛利氏を頼り逃げ延びる。

天正十年に信長が死ぬと、堺へ移り秀吉のもとで茶人として復帰

し、千利休らと親交を深めた。(

天正十四年堺で死去、享年五二)

室町幕府十五代将軍 足利義昭

本能寺の変を語る時には、いつも脇役の様な扱いで論じられる事が多い義昭だが、この人の行動は非常に重要で、信念の人である。

信長を改革者だと思いが余り、

旧勢力、守旧派だと思われがちだが、結果的には義昭の執念は実を結ぶのである。

よく室町幕府を義昭が亡命した時点で滅亡と捉える人が多いが、義昭は亡命後も現職の将軍であったし、諸国の大名たちへも統率権

を保持し続けた。

備後「鞆の浦」(広島県福山市)

に下ってから、御内書(将軍の公式文書)を発給し続けた。義昭は、天文六年(一五三七年)、第十二代将軍足利義晴の次男として生まれ、兄には、あの十三代将軍

義輝がいた。兄、義輝將軍が松永久秀や三好三人衆によつて惨殺された時（永祿八年…一五六五年「兵六の変」）、仏門（興福寺、一乗院門跡）に入っていて、「覚慶」と名乗っていた。

三好三人衆たちは、義昭を捕え

幽閉した。

義昭の弟、鹿苑院院主「周嵩」は、松永久秀の手の者によつて殺されている。

その後、覚慶（義昭）は、細川藤孝など幕臣に救出されている。

少し本題から外れるが、将軍義

昭の威光について考えたい。

元龜三年（一五七二年）、武田信玄は、將軍「足利義昭」の信長討伐令により上洛を開始する。

信長の真似をして天下に号令する為ではない、武家の棟梁と認め
る將軍義昭の命に従っての行動で

ある。

そうすると、よく言われる「兵農分離」など、農閑期の問題を語る前に、信玄軍を防ぐ事が信長軍にできるかどうかを考えなくてはならない。

信玄軍は単独軍ではない、浅井

朝倉連合軍は健在で、大坂本願寺（石山）もこの時將軍義昭の要請に呼応している。

摂津勢は動向を注視しているだろうし、信玄軍が家康軍を撃破しながら進軍している事を知っているだけに、信長軍が初戦に負けた

瞬間、大勢は決するのではないか。
やはり織田信長にとつては、絶
体絶命のピンチであつた事をしつ
かりと捉えないと歴史を見誤るの
ではないか。

この時の、信玄上洛軍に対する
信長樂觀論が存在する事が信じら

れない。

天下を目指しているのではなく、
將軍の命に従って決起した、信玄
率いる最強武田軍を、歴史の結果
だけを見て、安直に信長には敵わ
なかつただとか、春には甲斐の国
へ帰らないといけないので、兵農

分離していない軍に勝ち目が無いなどの理屈は合わない。この時点で、信玄に敗れたら、信長は本能寺の変の前に滅んでいゝる事は火を見るより明らか。

もう一つ、余り言われていない事で考えて頂きたい事がある。

武田信玄はなぜ上洛軍を起せたのか？

川中島であれほど争った、関東管領上杉謙信も健在で、この正義と信念の人はもちろん、将軍義昭を支持している。

だからこそ、武田信玄は上洛軍

を動かさせたし、北条氏もまた積極的賛同ではなくとも、將軍義昭の意向に従ったのではないか、だからこそ信玄は背後や国元を心配せず、動けたし、武田軍の上洛を知った全国の諸将は、織田家滅亡を確信したのではないだろうか。

信長は、武田信玄と上杉謙信を本気で恐れていたと思うが、彼らが將軍義昭を崇め敬う姿を見て、能力の限界をも感じていただろう。

信長は、武田軍に対して現在の我々には計り知れない手を打っていただろうし、結果は信玄の寿命

が尽きるので、日の目を見なかつた作戦など多く存在したのではないか。

この信玄の上洛についても、もっと多面的な見方をしないと、結果だけを重要視するあまり、当時おかれていた状況の真実から遠く

離れてしまい、伝説なのか真実なのか
が区別がつかなくなつて伝わ
っていると感じる。

短絡的な発想ではなく、もう少し
豊かな目で物事を見ないと、薄
氷を踏む思いで時代を切り抜けて
いる猛者たちに申し訳ない気がす

る。

信長は上杉謙信へ「洛中洛外図」
（狩野永徳筆）を贈っている。（
国宝）

都での出来事や軍事行為に対す
る言い訳を謙信に行い常に報告を
怠らない。明らかにご機嫌取りの

行為であつて謙信に信頼されよう
と努力している。上杉家に対して
細心の注意を払い敵視されないよ
うに務めている。

信長がいかに謙信を恐れていた
かがよく分かる。

千利休

この人物が「利休」と名乗るのは、天正十三年（一五八五年）からであるので、「宗易」と書くべきかも知れないが、統一し利休と記す。

織田信長が堺を直轄地とした時に、茶頭として仕え、後に秀吉に仕える。

秀吉の勘気に触れ、切腹を命じられている。

利休とは、どのような人物であるのか？
秀吉との関係は？
信長

の傍に仕え、光秀を見ていて、秀吉の所業の裏の裏まで知っていたのではないか。

死罪になった理由に明確なものではなく、伝説の様なものばかり。

大徳寺三門の木像の話などはひどいもので、とても利休を死罪に

できる様な話ではない。

その他の話もいちいち紹介しないが、取るに足らない説ばかり。

唯一、茶道に対する考え方で対立した話は、深みがあるが、わびさびだけで切腹を命じるのには、無理があるのではないか。

弟、豊臣秀長の死後、秀吉政権の歯車が狂い出すのだが、秀吉にとつて利休の存在は、信長とつながるものがあつて、常に心の奥底に言い知れぬ恐怖、いや畏怖の様な信長に抱いていた思いに近い、信長を思い出す様な存在ではなか

つたか。

ある時、些細な事で不安が増大し、秀吉自身も秀長を失った事で、たがが外れ自身も老いて来ており、利休さえ居なくなれば、と考えたのではないか。

とにかく、目の前から消し去り

たかつた。

それも、永遠に。

単なる推理の様な事になつてしまふのだが、利休という人物は、秀吉が人たらしの術や情報網で手玉に取れた諸将たちとは、やはり異質な存在であつたのではないだ

ろうか。

本能寺の変には、利休黒幕説まで存在するが、利休にとっては信長は保護者であつて、よき理解者。信長を倒す理由はまつたくない。

秀吉にとっては、唯一、自分に屈しなかつた人物ではないだろう

か、織田信雄、織田有楽斎や足利義昭の様に、豊臣の世になつて秀吉に屈辱的に仕えた者たちとは異なり、最後まで秀吉に膝を曲げない、屈強な心の持ち主であつた。

秀吉は遂に手に余して、殺すしか方法が無かつたのではないか。

千利休という人物は、この時代において、秀吉に唯一、一度も平伏す事の無かつた人で、主筋は信長のみと、一徹を貫いた偉人であった。

細川家の思惑

細川藤孝（長岡藤孝、後の幽斎）
この人物の実像は、通説とは全く異なる。

明智光秀と懇意で、明智軍へ参陣するのが当然と思われていた武

将。

嫡男忠興の正室は、明智光秀の娘「玉、後の細川ガラシヤ」。

この細川親子の行動には色々な説が語られて来たが、時代の結果を見てみると不思議なものが見えて来る。

秀吉との関係も本能寺の変後を見るとき、明智光秀側へ同調する意思は最初から全く無かったのは明らかで、それどころか細川藤孝の行動は、秀吉側へ逐一情報を流すスパイ的な役割を担っていたと見受けられる。

だからこそ本能寺の変後は、目
覚ましい出世をしている。これは、
論功行賞以外の何物でもないと思
われる。

藤孝は、光秀と同じく、室町幕
府幕臣であつた（永禄六年諸役人
附）、本来、將軍義昭へ近い人物

の様に思われがちだが、真つ先に
見限つて織田信長配下となる人物。
明智光秀と細川藤孝の関係をよ
く調べると、明智光秀は細川藤孝
に仕えていた可能性が高い。

興福寺多門院の院主英俊の「多
門院日記」や、ルイス・フロイス

の「日本史」に細川藤孝仕えていたと書かれている。

十三代将軍義輝の時代には、幕臣では無かった光秀も、義輝暗殺後の十五代将軍「義昭」時代に幕臣に取り立てられて、手腕を發揮していた。

その後、織田信長にも評価され、藤孝をしのぐ勢いを手にする。

元配下であつた光秀が、自分を凌ぐ立場になつて行く様を見ながら藤孝は何を思つただらう。

將軍義昭と袂を分かち、信長配下になつた後に立場は逆転し、明

智配下の武将として細川家は組み込まれて行く。

藤孝や光秀たちには、時代が信長へ傾いている事は確信を持って感じていただろうが、自分たちの想像を超える大魔王に、いつしか恐怖、不安の方が大きくなっ行って

ったのではないか。

光秀は、旧秩序「室町幕府」と「朝廷」を中心にする日本の伝統的手法を選択し、藤孝は、「朝廷」と「秀吉」という、自分が想定できざる権力者を選んだのではないだろうか、私はそう考える。

細川家は、後に家康の時代とみるや徳川家へ積極的に近づく。お家の存続為に手段は選ばない。

この乱世を生き抜く為の処世術に長けた一族である事を、光秀は見抜けなかつたのであつて、光秀も覇者とは成りえない器量であつ

たと言わざるをえない。

光秀が、細川藤孝を最も頼りにしたのは間違いないだろうから、これも不徳の致す処なのだろう。

もつとも、味方に成りえた可能性がゼロではない。もし秀吉軍の動きがもう少し鈍いか、もしくはは

毛利軍が少しでも追撃するかで、どちらに付くかは変わるであろうし、摂津衆（中川氏など）や、筒井順慶が光秀に付く動きを見せれば、細川親子は、ひよつとしたら秀吉を見限っていたかもしれない。

そうなると、中国大返しで姫路

に到着した秀吉は、和議を求めた可能性も有るわけで、家康は間違
いなく明智に援軍を送り、長宗我
部も瀬戸内海に明智援軍を差し向
けただろう。

細川家としては、両勢力の動き
をよく見ており、勝つ方へ味方す

るといふ、この時代の普通の思考で判断しただけなのかも知れない。秀吉は援軍として参加する事もなく、ただ中立を守っただけの細川家に対して、論功行賞で非常に優遇している。

天下分け目の一戦「山崎の合戦」

は、秀吉の楽勝ではなく、本当に天下分け目の戦いであつた。

根回しの差が勝敗を分けたのかも知れないこの点には、秀吉の能力に勝る武将は存在しない。

長宗我部元親

元親に関しては、やはり田舎大名の域を出ていないと思われる。

信長との蜜月期に四国の覇者となり、秀吉の横槍で信長の方針が転換し信長と敵対する。

正室は石谷光正の娘。

嫡男信親の正室は、石谷頼辰の娘で、斎藤利三の姪と言われる。

頼辰は、斎藤利三の実兄で、実母の再婚相手である、石谷光政の養子となった。光政と共に將軍義輝に仕えたと伝わる。

秀吉の画策で、信長の方針が変
わった時に、光秀の使者として、
元親の説得に赴くが成功しなかつ
た。明智方としては、長宗我部に
勝ち目はないので、何度も必死に
説いたようだが、元親には通じな
かった。

私は子供の頃に、司馬遼太郎著

の「夏草の賦」を読んだ時、心躍り興奮したのを今でも覚えており、今回本能寺の変の真実を書くにあたり、長宗我部家を調べてみて感じたのは、地の不利もあるのだらうが、余りにも鈍い。

非常に残念な思いが個人的にす
る。

斎藤利三などの説得に応じず、
山崎の合戦では、光秀の救援に動
けず。意思の疎通があつたであろ
う、家康に対しては、小牧長久手
の戦いに救援できず。関ヶ原に至

つては、本来なら東軍に味方した
かったのに心ならずも西軍につい
てしまった有様。

この様に、期に対して鈍では、
この時代は生き残れなくて当然な
のかもしれない。

この辺りは、秀吉とは好対照だ

ろう。

私は、秀吉と毛利勢力、細川家は内通していたと考えている。

そして、明智、徳川、長宗我部も緩やかに連携していたと考える。がしかし、秀吉の情報戦と行動力には及ばなかった。

その時！ 天正十年夏

繰り返して記す。

よく、なぜ信長は、あれほど無警戒、無防備で本能寺に居たのか？ などと言う話を聞くのだが、よく考えて欲しい。確かに本能寺

で信長に寄り添う供回りは、二十
〜三十人ほど、多く見積もっても
五十人は居ないであろう。しかし、
嫡男織田信忠は、数千の兵を率い
て京に居る。（二千から三千人…
三千人説の方が有力）

そして何より大事なものは、明智

軍の構成だが、兵力としては、実は信長軍なのである。

基本的に織田軍団の武将たちは、ほとんど私兵は持っておらず、どの部隊も信長より与えられている兵力なのである。

ではなぜ京に向かったか。

ここに誤解があるのだが、明智軍総勢一万三千人が老ノ坂を本来は西へ進み秀吉の応援に向かう予定が、東に進路をとり、京へ向かう。急きよ予定の変更の様に言われるが、あり得ない。

ここでもよく考えて欲しい。

一万数千人が武装して、しかも馬などを連れて行軍すれば、どれほどの音を発するのかを、それはもう大音響で、京の人々も目が覚めたであろう。

そう、皆知っていたのである。

信長の命で、明智軍がこの日辺り

に到着する事を。

だからこそ、信忠の軍勢も京都所司代の村井貞勝も武装する事なく迎えたのであつて、信長にしてみれば、自分の軍隊が自身の命令で集まるわけだから、より安全になつただけの事であつたはず。

ひよつとすると、明智軍を京に
集結させて、盛大に出陣式でもや
つもりではなかつたのか、信長自
身も中国地方へ出陣する予定であ
つたので、織田軍の力を朝廷と世
間に見せ付け様としたのではない
か。派手好きな信長らしい。

京都は当時、「平安城」（平安京の異名）などと呼ばれた都で、京の七口などの木戸が存在した。

木戸とは、出入り口の事で木戸番が居た。七口を管轄するのは、京都所司代村井貞勝であって、桂川を超えて来た明智軍も木戸を通

らなければ、京の都へは入れない。
七口で何かあれば、京都所司代が
手勢を引き連れ駆けつける。

もし明智軍の先方、斎藤利三軍
が木戸を破壊しながら進んだら一
体どうなるか？

町中は大騒ぎで、妙覚寺に泊つ

ていた信忠は戦鬪準備をすするだろ
うし、何より信長は急ぎ逃げる事
ができただろう。

一般に忘れられている事である
が、本能寺の変は、一地方都市で
起こったのではない、延暦十三年
(七九四年)に桓武天皇により定

められた都で起こった事件である。都を守る警備体制が貧弱なはずはなく、何度も戦火を経験した成熟した都市なのである。

京都所司代の村井貞勝や織田信忠は、本能寺が襲われた後に二条御所へ移動しているので、明智軍

が本能寺を強襲するまでは、何も
予定外の出来事はなかつた証拠で
はないか。

明智軍が未明に到着する事を知
っていた村井は、木戸を開け準備
をし出迎えた事だろう。

この時、もう一つ不思議な事が

起こっている。

例の遠征軍解散の件である。

本能寺の変が起こったまさにその時、堺方面に集結している長宗我部征伐軍、大将織田信孝（神戸信孝）、副将丹羽長秀率いる織田軍約三万。

本能寺の変の一報を聞いたとたん、副将以下、国許へ戻る事を早々に決め情勢を慎重に見極める手段を取る。

もちろん、血の気の多い信孝は大將でもあるので、急ぎ京を目指す事を主張したただろう。

当然の如く。

敵が明智軍であり、大よその兵力は想定できる。しかも自分たちは信長の命令で戦闘準備を行っていた。まさにその時なのである。

なのに解散？

本能寺の変を知った時、織田信

孝、丹羽長秀は、岸和田にて蜂屋氏の接待を受けていて、大坂住吉に駐軍していた本隊とは別行動であつたので、軍事行動が取れずに居た所、兵力が激減してやむを得ず守りを固め秀吉軍の到着を待つかたちとなつた。

この話もおかしい。

秀吉は、摂津衆をはじめ、全国の多くの武将たちに信長公健在、光秀に騙されるなど書き送り、自身が掴んだ情報を元に準備万端であった。（この時の文は多く残されてる）

その様な時に長宗我部征討軍が三々五々解散できざるはずがない。信長軍の軍規の厳しさは、日本の歴史上、一、二を争うもの。源九郎判官義経と争うぐらいに軍の規律は高く厳しい。

どちらの軍も、京での乱暴、狼

藉、略奪、などが起これば、自軍の兵士でも処罰するほどだ。義経は未だに人気が高い、特に京都では高い。

なぜなら、義経が京に入る前に都をおさえていた、源義仲（木曾義仲）軍は、京の都で略奪者とな

っていた。

義仲を滅ぼした義経軍は、京の都で軍規厳しく治安を守り、京の人々の支持を今だに受けている。

信長軍も同じである。

話は回り道をしたが、要はこの様に軍規が厳しく統制がとれた信

長軍が、勝手に国許へなど帰って行くはずがない事も見逃されてい
ると思う。

少なくとも全軍、堺方面で待機
していたなら理解できるが、解散
となると、考えられる事は、「い
つかは起こる」「近い内に起こる」

時間の問題。もしこの様に考えている者たちが多いとすれば、「光秀謀反！」と聞けば、一目散で日和見主義に走り、情勢を判断しようとしたのではないか。

なぜなら彼らには光秀や秀吉の様にグラウンドデザインを描いてい

ないのであるから、次は誰に付くかのみが、自らの保身であり、領地領民を守る事のできる唯一の方法だからである。

秀吉伝説

秀吉という人物の生涯を追うと、非常に興味をそそられる。

時代の勝利者としての資料と、徳川時代による反秀吉的な資料が存在するが、どちらにしても魅力

的な人物であつた事は間違いない。
前半生に見られるエネルギーシ
ュな出世物語。それに反し、権力
者として劣化して行く後半生。

信長とはまた異次元の天才「秀
吉」。やはり、長生きしすぎたの
か。天下をその手に治めた時、信

長と同じく孤独な天才となつてしまつた。老いて子ができた為に、後継者の秀次に不信を抱き、追いつめて殺しても飽き足らず、一族全てを処刑する所業。

信長に間近で学び、模倣しながら自身で改良できた天才の末路も、

また惨めに思えてならない。

徳川家康は、信長、秀吉を見て多くのものを吸収し、結果、長期政権の土台を築けたのは間違いないであろう。

秀吉の出自には、有名な説が二つある。

一つは、「太閤素生記」で言われている、信長の足輕であつた木下弥右衛門と妻なか（後の大政所）との間に生まれたとされる説。

もう一つは、秀吉が大村由己に書かせた秀吉公認の伝記「天正記」（関白任官記）による、萩中納言

が尾張に流された時に一人の女の子をもうけ、その子が宮中に仕えて帝のお手がつき、尾張に戻って秀吉を生んだと記述されている。

つまり、天皇のご落胤だといふ奇説。平清盛でもあるまいし、その確率はほぼないと考えてよかる

う。

確かに、関白になるには、それ相応の伝説が必要である事は分かるが、少々滑稽な話と切捨てる失礼であろうか。

ただ、この戦国時代に各地で大名たちが、源氏、平氏であると出

自をうたうが、どれもこれも不確かで、応仁の乱以後の混乱期のどさくさに自称しているに過ぎない。そんな事は、当時の人々には常識であって、その様な世の中の風習の中のご落胤説であるので、大した事はないのでろう。

幕府をひらくのに源氏でないと

「征夷大將軍」になれない。平氏では資格がないので、平氏を名乗る織田信長は、望んでも征夷大將軍にはなれない、したがって幕府をひらく事はできない。と言われるが、そんな事があるはずがない。

後の家康が突然「源氏」を名乗り、征夷大將軍になつたのは、権力を手にし、機は熟したので最善策をとつただけで、信長であれば平氏を名乗っていても、いつでも幕府をひらけたはず。望んでいなかったただけの事。

秀吉は、信長亡き後、出自を記憶する者たちが未だ多すぎるので、少々苦勞をするが、もしもう少し時間を掛ければ、征夷大將軍拜命も可能であつたと考える。権力の掌握とは、そう言うものだと確信する。

秀吉は年齢的にも跡取りの事でも、問題を抱えていたので、一刻を争う事態であつた。それだけの事であろう。

秀吉は、ある時大勝負に出た。金ヶ崎の戦い、退き口崩れである。

朝倉氏を攻めた織田勢に対して、

信長の義弟である、浅井長政が突
然裏切り、織田徳川連合軍が窮地
に陥った出来事。多くの歴史書、
小説には秀吉軍の勇猛果敢な姿を
描くが、俗説に過ぎない様である。
やはり、勝者によつて資料は書き
換えられるものであつて、覇者が

望もうが望もまいが関係なく事実
は歪められるもの。

この件も、「大日本史料」（東
大史料編纂所刊）の中の「武家雲
箋」所収文書によると、秀吉が中
心ではなく、明智光秀も居て、池
田勝正が指揮をとったようである。

この退き口の戦いは、無事に信長を逃がし、任務を遂行したが、一番の功労者は、池田勝正である事が分かる。

秀吉は信長のような天才型では無いが、信長が決して持ち合わせないが、信長が決して持っていた。ていなかっただものを持っていた。

それは、「人心掌握術」俗に言う
「人たらし」である。

この分野で秀吉の右に出る者は
いない。

命を掛けて領民領地を守るこの
時代において、「この人の下で」、
と思わす力は確かに凄い。この魅

力は天性のものだろう。

そしてもう一つ。

秀吉が天下を手中にできた一番の要因は、情報戦に長けていた事。

この点は、天分と言うよりは本人の努力と、そして参謀たちの層の厚さがあつたからこそだと思われ

る。

「竹中半兵衛」「黒田官兵衛」、
そして秀吉の弟「秀長」、他の戦
国武将よりも人材に恵まれていた
事は間違いない。

これも秀吉の人望のあつさであ
ろうが、もしかすると自分に苦言

や真の助言をできる人物が必要な事も覇者として理解していたのかもしれない。若き日の秀吉は本当に他人の言う事に耳をかし、まわりの人材に支えられた。ただ残念ながら秀吉の後半生は老いて天性の才が鈍り、他人の意見に耳をか

さなくなつた。関白「秀次」を死に追いやり、女子供たち一族までも処刑する所業は、もはや常軌を逸しており、秀吉時代の終焉を象徴していた。

対して、家康という人物は、この点にも十分配慮し、責任は明確

にするが無関係な一族を処刑する
様な事は行わなかつた。

長宗我部討伐軍

織田信孝（神戸）が率いる、長宗我部討伐軍は、本能寺の変の当日六月二日に出兵予定であつた。

長宗我部討伐軍の総勢は、正確に掴めないのであるが、少なく見

積もつても、一万五千人、多い資
料では約三万人の規模の派兵であ
る（三万人説の方が有力）。

前にも述べたが、この軍団が、
本能寺の変を聞いて解散するので
ある。

これはもう不思議と言うよりは、

各武将たちにとつて、信長の死は、

青天の霹靂ではなく、「遂に事が起こつた！」と思つたのではないだらうか。心の何処かに思うところがあり、恐れていた事か、はたまた望んでいた事が起こつたかからこそ、直ぐに京へ駆けつけな

かつたのではないか。

大将信孝は間違ひなく本能寺へ急行する事を主張したが、諸将は国元へ兵を返したり、京の情勢を確認する動きをとる。

副将丹羽長秀は慎重論を主張した。

この選択は従来余り問題にされて来なかつたが、通常信長軍では有り得ない状態である事を認識して欲しい。

何故なら、この時点で信長、信忠親子の生死は不明であつて、一刻も早く援軍に駆け付けるのが常

識である。現に信忠は二条御所で奮戦中であつた。

秀吉は中国大返しの最中に、各地の武将宛てに信長、信忠親子無事脱出と文を送つて情報戦を仕掛けて成功するが、この時点では、信長、信忠親子は生きていると考

えて動くのが当然だ。ましてや信長軍なのである。

もしこの時に信長が、本能寺から無事に脱出していれば、今度は自分たちの身が危ない。

いや、過去の例から見ても、切腹どころでは済まないかもしれない。

救援に向かわないなどは考えられない。

総大将の信孝にしてもだらしない。諸将が動かなくとも、自軍の兵力が四千ほどあるのだから、先駆けて駆けつけければ、都は大混乱、嫡男信忠は助けられたかも知れな

い。

織田家の家紋を掲げて北上すれば、実は明智軍はひとたまりもなかつたであらう。

まだこの時点では、明智軍の兵士のほとんどが、本能寺を襲撃で誰を打ち取って二条御所で誰を困

んでいるかを知らない状態。

したがって、三男信孝にとって
は、ここは大勝負をすべき処であ
った。彼にはそれができなかつた
し、秀吉はやり遂げた。

人生の大一番とは、そう言うも
のではないだろうか。

この、討伐軍の動きもまた謎の謎なのである。

よく分からないのが、変後の齋藤利三の行動である。長宗我部を守る事も、本能寺の変を起こす一つの要因だと思ふのだが、信長を打ち取った後、秀吉と山崎で大決

戦を行うまでの間に、長宗我部へもつと強く働き掛けができたはずで、動きの鈍い長宗我部勢力の一部でも派遣要請ができたはず。なのに形跡がない。

朝廷工作などに追われている間に、気が付けば秀吉が迫っていた

為だろうか。

秀吉は、中国大返しを行って姫路に到着した時に二泊している。

私はこの時点で、朝廷を後ろ盾にした明智勢力との話し合いが決裂したと考えている。

もちろん秀吉はこの間、兵士た

ちの休息と武具、武器の調達、装備をさせていると思う。

大返しは、着の身着のままの強行軍のはずで、そのままではとても戦えない。

秀吉は光秀や利三が描く、旧秩序に従う風を見せ時間を稼ぎ、朝

廷や義昭の動きも確認し、摂津衆などどちらに付くか不明な連中に釘を刺し、長宗我部や徳川の領土確保の動きを知った上で、決戦に臨んだと私は確信している。

もし、姫路に着いたばかりの秀吉軍を光秀軍が襲えば強行日程で

移動して来た秀吉軍に勝ち目はな
かった。光秀軍は長宗我部討伐軍
の反撃に備えていたはずであるか
ら本来は中国大返しを行つた秀吉
軍に対応できたはずである。だが
実情は、明智光秀や斎藤利三が描
いた反織田連合の中核である毛利

家ですら、既に秀吉と同盟していたと私は見ていて、細川家は内通しているわけなので、明智勢は、明智、徳川、長宗我部連合を急がなければならなかつたと考える。

本能寺の変を聞いて大混乱したと伝わる長宗我部討伐軍。副将で

ある丹羽長秀、この男と秀吉の間では既に、事が起こった時の連携などが話し合われていたのではな
いだろうか。

長秀は変後は一貫して秀吉を支
持するが、天正十三年死期を悟り
割腹自殺したと伝わる。胃癌であ

つた様だが、織田家を顧みない秀吉の本性に気付き死期が迫ってからは秀吉との関わりを避けていた様だ。俗説では切腹時に自ら取り出した病巢を秀吉に送りつけたとも伝わる。長秀もまた、秀吉の人たらし術に翻弄された挙句に、主

家を裏切る片棒を担がされてしま
った。

敗れ去ったのは、光秀や利三だ
けではない。織田信雄や織田信孝
も、この時点ですでに秀吉に敗れ
ていたのである。

丹羽長秀と安土城

信長とは兄弟同然で育つた丹羽長秀。

天文四年（一五三五年）九月二十日、丹羽長政の次男として尾張国春日井郡兎玉に生まれたとされ

る。信長の一つ年下。

武功としては、秀吉や勝家ほどの目覚しいものはないが、信長の信頼は厚く、築城などの特殊な技術は長秀の右に出る者は居なかつた。

織田軍団には人材が揃っていた。

「羽柴秀吉」という名をよく見て頂きたい。

以前は一般的に羽柴の名は、「丹羽」と「柴田」から一字ずつ貰ったと言われていたが、最近の説ではこれを否定するものが多い。

長秀の「長」は、信長の長より

頂いた一字とする説。この時代を考えるとその通りだと思う、「信長」の下の「長」を自分の名前の上の一字に頂く事は家臣が拝名する場合の常識。

では、秀吉の「羽柴性」についてはどうか？ どう考えても、丹

羽長秀、柴田勝家より一字ずつ頂いたと考えるのが自然である。

なぜ現在では否定的な意見が多いのか、それは資料として残っていないからであつて、秀吉が作らせた伝記や偽歴史書に載っていないからである。それはなぜか？

秀吉が望んだ名ではなく、信長の命で改名させられたのではないか。

木下性から、秀吉が決して望んでいなかった、「羽柴」性を名乗る様に信長が命じた。

こう考えれば、この名の説明が

つく。

秀吉にすれば、拒否する事のできない相手、信長よりの命令で仕方なく名乗った。名乗ってみると自分にとっては良い事が続き、挙句の果てには、信長すらいなくなつた。経緯はどうであれ、めでた

い名前。

私はそう考えるべきだと思つて
いる。

丹羽長秀も柴田勝家同様、信長
にとって優秀な部下であつたから
こそ秀吉を改名させたのではない
か。

丹羽長秀。彼は戦も決して下手ではなかったが、しかし他の事も何でもできた。信長配下の武将の中でも、ナンバーワンのオールラウンドプレイヤー。

あの安土の城も彼が作った。もちろん命じたのは信長で、構想も

細かく語ったであろう。それを長秀は理解し、信長の意向を形にできた。

安土城址には、現在でも強固な石垣が残るが、この石垣は穴太積みで、長秀が比叡山で使用されていた石の積み方を見て、安土城築

城の折に採用した。石工衆である穴太衆を使う辺りも長秀の能力の高さを感じる。

この穴太衆の技術は現在でも受け継がれていて、新名神高速道路の建設に伴う工事でも穴太積みが使われた。穴太積みは、コンクリ

ートブロック壁の強度を上回り、技術の高さが科学的にも証明されている。

安土城は、山崎の合戦直後に、天主や本丸が焼けている。しかし何故焼けたかは不明であって、確かな資料は残されていない。

明智秀満、織田信雄犯人説などがあるが、落雷説もあり不明。

長秀自身は、安土城の炎上をどの様に感じたのであろうか？ 手塩に掛けて築いた現場責任者としての思い。

きつと長秀には、燃やす必要の

ない安土城に火を掛けた輩を知つていた事だろ。う。

羽柴秀長

小一郎と呼ばれた羽柴秀長、秀吉の弟（異父弟とも）で、秀吉の片腕。

私はこの人物がもし秀吉の傍に居なければ、信長の後継者になれ

なかつたし、それどころか、明智軍を破る事すらできなかつたと考える。彼は完璧な補佐役ではあるが実は秀吉の真の参謀でもあつた。竹中半兵衛は若くして亡くなり、黒田官兵衛は知略に長けているが、秀吉自身心から信頼できる相手で

はない。

そんな事は、官兵衛自身が一番よく知っていて、事ある毎に秀長をたてる。

羽柴（豊臣）勢の中心は実は秀長ではないか、利休との関係、家康への配慮、秀次へ支援。どれを

とつても屋台骨を支えているのは秀長である。

だからこそ、秀長の生前と死後で秀吉の行動がまるで違う性質を見せる。

本題から外れてしまうので、秀長亡き後の秀吉の愚行はここでは

詳しく述べないが秀長の存在がとて重要だった事柄を挙げると、やはり天下分け目の天王山「山崎の合戦」この時の活躍は大きい。

戦国武将としては余り目立たないが、実は軍を率いる能力は超一流。常に秀吉軍の中核を任され重

要な役回りを的確にこなす、優秀な武将。秀吉軍の戦鬪部隊は、秀長が率いる部隊が敵と戦う中核であつた。

山崎の合戦でも、秀吉軍（名目上は大將信孝）の先方は秀長隊で、五千の兵で明智軍の先方、斎藤隊

をよく防いだ。秀吉軍は丹羽長秀や織田信孝勢を合わせ約三万ほどになっていったが、寄せ集めの兵力で、明智軍一万三千は精鋭部隊である。

当時の山崎は沼地が広がっており、天王山の脇を抜ける道は狭く、

明智軍が秀吉軍を各個撃破する事は容易に可能であつた。

この日午後より合戦の火蓋が切られた時、秀吉軍の隊列は長く伸びきつており、最後尾は未だ大坂方面に居て数キロは離れていた。

当然、秀吉軍の先方部隊は明智軍

の猛攻を受け大混乱に陥る。ここで、黒田官兵衛の大活躍がよく言われるが、黒田隊は数百の規模、確かに戦線をかき回し時間を稼いだであろうが、本当に持ち応えたのは秀長隊であつて、この時に斎藤隊の攻撃を秀長隊が防げなかつ

たら、天王山と沼地の間で秀吉軍は撃破されていたのである。

戦いのあった天王山付近の地図を見るとよく分かるが、準備の整っていた明智軍と急ごしらえの秀吉軍がこの地で戦えば、初戦は明智軍に非常に有利で、もし秀長隊

が斎藤隊に撃破されていれば、その時点で秀吉軍は総崩れで退却だろう。この時秀長は火縄銃を並べ槍を構え馬を揃えて斎藤隊の攻撃に耐えに耐えた。利三と秀長、両武将の運命を掛けた戦いであつたはず。俗に言われる様に秀吉軍圧

倒的有利な凶式などどこにもない、薄氷の勝利であつた事は間違いない。

秀長隊が敗れたとしても、もちろん秀吉本隊は無事なので、大勢を立て直し再決戦となるが、明智軍が初戦を勝利した場合、筒井順

慶を始め、摂津衆などが明智へ加勢する可能性が高くなる。そうなれば、細川家が明智へ付く可能性が出て来る。

更に、明智軍が時間を稼げた場合には切り札である、徳川軍や長宗我部軍の援軍が間に合う可能性

が出て来る。そうなれば形勢は逆
転する。

山崎の合戦はやはり天王山、天
下分け目の戦いであつた。

幻の明智、徳川連合

ここで触れたいのは、明智家と徳川家という事ではなく、明智軍団と徳川軍団として見た時に、家臣団同士の繋がりなど、余り語られないレベルの交流も頻繁にあり、

特に斎藤利三と徳川家臣団との関係は深いものがあつたのではないか。

本能寺の変で信長を倒した光秀は、堺を旅していた家康一行に急ぎ知らせを送つたであらう。家康も馬鹿ではないので、信長の動向

を（信忠を含む）知る手だてには
抜かりがなかつたはず。それらの
情報よりも明智よりの伝達は早か
つたと思うし、京に戻るはずであ
つた家康一行は、急ぐ様子もなく
京から離れて堺でゆつくりと過ご
していた。

そこへ知らせが届き、予期した行動で急ぎ岡崎へ戻った。

「神君伊賀越え」などは、ただの伝説であり、後の徳川時代に家康の偉業と、明智軍団との関わりを否定しておく為に創作された物語に過ぎない。

家康の誤算は、岡崎に戻り、武田領の切り取りを行って信長の勢力圏を奪い、明智軍に合流する為に背後の安全確保に動いている最中に、予期せぬ秀吉軍の中国大返しがあり、光秀が山崎の合戦で敗れ去ったことである。それ以外は

予定通りであつた。

岡崎へ戻る道中も、河内国四条
畷付近から、本多忠勝らわずかの
供回りを連れて出立した。山城国
宇治田原、近江国甲賀の小川城に
辿り着いた時、服部半蔵たち伊賀
者と合流した後、伊賀国の険しい

山道を経て加太峠を越え、伊勢国津辺りに出た。そして海路で領国の三河国大浜へ戻り、岡崎城へ帰還した。

家康はこの道中、手筈通りに同行していた、穴山信君（梅雪）を始末し、夜盗に襲われた事とした。

家康にとって、国元に戻り先ず行う事は、旧武田領（この時は織田領）の切り取りであつて背後の安全確保であつた。

その為には、武田一門で織田方の梅雪は邪魔な存在であつた。

明智徳川連合軍にとっては全てが順調に推移していた。唯一人の思惑を除いて。

斎藤利三

利三という武將は決して有名ではないかも知れないが、この時代のキーマンであつた。

本能寺の変での役割は勿論の事であるが、後の世にも多大な影響

を及ぼしている。私の考えでは、本能寺の変の真相を誰よりも知っている最重要人物だと捉えている。

後の徳川政権において、お福を筆頭に斎藤利三に縁する者たちの生涯を見れば、徳川家康や本多正信などが斎藤利三をどの様に考え

ていたかがよく分かる。

明智光秀ばかりを見ていても真相は見えて来ない。

利三には、大将「光秀」を見ていて、信長に取って代わる事ができるとは思わなかつただらうが、恐怖政治からの脱却を成し遂げる

人物だとは思っていたらろう。

よく耳にする信長の偉大さは、現代の我々の勝手な評価であつて、同時代の人々に歓迎されていたかどうかは別次元の話である。

鼻肩の引き倒しは慎むべき。

改革者が現れた時、いつの時代

も庶民は戸惑い、慄き恐怖するものだろう。

山崎の合戦で、先陣をきり攻め立てる斎藤軍に対して、豊臣軍本隊が来るまで防ぎきるのは、羽柴秀長である。

秀長配下の先方、高山右近隊と

の決戦が全てであつた。

もし、利三軍の猛攻を秀長軍が持ちこたえられなければ、明智軍の勢いは増し、本隊である秀吉軍をも蹴散らしたかもしれない。

そうなれば、筒井重慶や細川幽斎は、明智へ見方した可能性が高

い。摂津衆は、中川家を筆頭に明智へ合力したはずである。最後まで光秀に付き従い支えたのは、幕府衆である。

長年の同士の多くが山崎の合戦で生涯を終えるが、光秀との絆の深さを感じずにはおられない。室

町幕府幕臣の絆は深かった。

対して、細川藤孝との関係には違和感を覚える。藤孝にしても、信長に未練があつた様子もなく、冷静に情勢を判断した結果、秀吉に付いたのだらうが、明らかに光秀よりも秀吉の天下を望んだ節が

ある。これは個人的な感情ではな
いだらうか。

毛利家の謎

毛利家には、元就の言い伝えで、
「我が毛利家は、版図の保全のみ
を願い、天下を望むなかれ」と言
うのがある。

まあ、要するに京の都へ近づく

なとでも言い聞かせたのだらう。

毛利家に感じる不思議と言うか、違和感と言うのは、例の秀吉中国大返しの場合である。

秀吉が陣を引き京へ取って返した時、追撃する構えすら見せなかつた。当たり前だと思われるかも

知れないが、さにあらず。

よく言われる説で、高松城主である清水宗治の切腹で和議が成立し、秀吉との約束を律儀に毛利が守ったという話。

毛利は信長の恐ろしさは十分知っていたただろうが、その信長が亡

くなつたなら、秀吉との和議など反故にしても一行に構わないはず。毛利家とは、陰謀と策略で大きくなつた家柄であるはず。

仮に動いても宇喜多軍などに阻まれ、毛利軍は進めないと言う研究者も居る。

そんな事はない、少しでも毛利軍が追撃の姿勢を見せれば、秀吉軍は大混乱する可能性が高い。

余り重要視されないのが不思議なのだが、この時、毛利家は鞆の浦に將軍義昭を庇護し、毛利輝元は副將軍に任命されている。

秀吉が東へ進軍を開始した時、
將軍義昭は、自ら上洛の意思を毛
利家に何度も伝えていた。

しかし、毛利側は動かない。

この時すでに明智側より、本能
寺の変の詳細な情報は届いていた
だろうが、静観している。安国寺

恵瓊が暗躍し、秀吉との密約ができていたのだらう。

そもそも、この毛利との和平は、本能寺の変以前から条件折衝が行われているのではないだらうか？ そうでないと、安国寺などとの交渉の経過が日程的に合わない。

ここで考えて欲しい事がある。

そもそも秀吉は、毛利に手を焼いているから、信長に援軍要請をし、光秀軍が秀吉の後詰めに向かうのではなかつたか？

では、この和議の話で信長は知っていたのか？ 安国寺恵瓊との

交渉内容を、秀吉は報告していたのか？

いや一切報告していない。信長は本能寺の変の前日、六月一日時点でも、毛利を攻め滅ぼすと語っている。

では、秀吉の独断ではないか。

張りめぐらせた情報網や、細川藤孝などからもたらされた情報を分析し事が起こる可能性を読み取り、安国寺を通じ、毛利家とも独自のビジョンを共有していたのではないか。

もし、六月二日に本能寺で何事

も起こらず、光秀軍が援軍として中国地方へ進軍してくれば、その時点で和議の提案を信長にすれば良い事であつて、安国寺や毛利と図つて、清水宗治の切腹させる日を信長の許可を得た後に変更するだけの事で済む。

もし、信長に激情の病が出て、何が何でも毛利を攻め滅ぼせと命令されれば、秀吉はその通りに全力で事にあたり、次のチャンスを待つだけの事だったのではないか。

秀吉は黒幕ではないが、織田勢内部の不穏な気配も感じ取り、常

に準備を怠らずにいたからこそ奇跡の中国大返し、山崎の合戦と勝利し、信長の後継者と成り得たのではないか。

安国寺恵瓊が井上又右衛門尉に送った書簡には「信長之代、五年三年者持たるべく候。明年辺者、

公家などに成さるべく候かと見及び申し候。左候て後、高ころびにあをのけにころばれ候ずると見え申し候。藤吉郎さりとはの者に候」とある。

要約すると、「信長の代は、三年から五年は持つだろろうが長続き

はしない、その内に倒れるだろう。
藤吉郎（秀吉）はなかなかの人物
である」と天正元年に書き送つて
いる。

秀吉と恵瓊の関係は、今まで考
えられているよりも古く、既に秀
吉に取りこまれていたと見るべき

だらう。

これが、毛利軍の鈍さに見える
真実かも知れない。長宗我部家の
鈍さとは、質が異なる気がする。

小早川隆景（毛利元就三男、小
早川家へ養子）と、吉川元春（元
就次男、吉川家へ養子）は、「毛

利両川」と呼ばれ、毛利本家を支えていた。

長兄の隆元が若くして亡くなつた後は、その息子である毛利輝元を補佐し、織田信長にも対抗して来た。

天正十年（一五八二年）本能寺

で信長が討たれた事を知ると、備中高松城救援に来ていた吉川元春は追撃を主張したが、小早川隆景は停戦の協定を結んだ後である事を理由に秀吉軍を追撃しないと決めた。

隆景の先見性が毛利家を救った

と伝える逸話である。

この話が事実なら、小早川隆景が秀吉と内通していただけの事で、元春は聞かされていなかっただけではなにか。ではないか。

色々と言われるが、その証として、後の初期五大老を見れば、論

功行賞が一目瞭然ではないだろうか。

徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、小早川隆景、何と毛利家一族から、輝元と隆景が任命されている。

信長存命中は、敵方だった二家

がである。

秀吉が天下を手中に納めた後に、毛利家側は優遇されて行くが、だからと言って秀吉に格段の恩義があるわけではないし、將軍義昭への忠誠心も薄い。

この、小早川家から、関ヶ原の

戦いで戦況を決定付ける裏切り行為を行う、小早川秀秋（秀吉の正室ねねの兄の子で秀吉の養子）が出て来るのも歴史の不思議である。

徳川家康

「家康」、この人物のイメージは、ある意味完成度が高いと思われるが、戦国末期に頭角を現し、日本の歴史上、稀に見る奇跡的な長期政権を築いた偉人。確かに実

績は凄い。

何度も申し上げるが、今我々の持っているイメージは、勝者が捏造した史実に毒されている可能性がある。

例えば、よく知られている正妻と嫡男を死に追いやった「築山殿

事件」。

この事件の詳細は、天正七年（一五七九年）に起こった、正妻「築山殿」と嫡男「信康」が、織田信長の命により、家康が泣く泣く殺害を命じたとされる出来事。

この事件一つをとっても、よく

内容を検証すると、その曖昧さに愕然とする。

そもそも資料でこの事件を記しているのは、徳川幕府の史料のみで、事実として扱うには、余りにも資料が不足する。

更に、徳姫の「十二か条の弾劾

文」なる物の内容を読むと、この内容で、織田信長が家康に対して、正妻や嫡男の処分を命じるなんて事は有り得ないのではないか。

では、なぜ？

かの有名な大久保彦左衛門が書いた「三河物語」では、信長陰謀

説が主張されている。

嫡男信康の優秀さを恐れた信長が謀り、今の内に始末したとされる。同盟者の嫡男が優秀だから早めに芽を摘む？ 何と馬鹿げた話だろうか。

この話の様に、色々な俗説が出

回っているが、そもそも「築山殿事件」なる物が、存在したのか？家康には、築山殿と信康を殺さないといけない理由が別にあつて、自身の判断で命じたのに、後の世にそれとなく、信長の圧力を匂わす事にした。

実は、単なる松平家のお家騒動ではなかつたか。

少なくとも、信長が命じたという信頼できる資料や証拠はない。

いかに信長であつても、他家の嫡男や正室の処分を命じる事はできない。

この辺りの説も信長像を歪めて
いると思われる。

徳川家康は、いつから徳川を名
乗ったのか？ 永禄九年（一五六
七年）に、それまでの松平姓から
改姓している。

本能寺の変で信長が討たれる十

五年も前の事で、源氏を名乗る準備にしては早すぎる。

もしかすると家康は、桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討たれた瞬間から、自身のつきを感じ、清州同盟（織田徳川同盟）を結んだ。

信長を近くで見ると、大天才であるが故に身の危うさなど短命の可能性を感じたのではないだろうか。

この時より常に信長亡き後の立ち位置を想像し、準備を怠っていないなかつたと思う事は、考え過ぎだ

ろうか。

家康について、もう少し語りたい。

時代は少し下り、関ヶ原の戦いにおいて、東軍、西軍が相まみえる大決戦。

結果は半日足らずの戦いの末、

東軍「家康」の勝利。

しかし、息子「秀忠」（後の徳川二代将軍）は、真田昌幸に上田で足止めをくらい関ヶ原の戦い之間に合わなかつた。

家康の怒りがかつたとの事。

当然だろう、天下分け目の大決

戦に遅参したのだから。

では、それでも尚、なぜ二代将軍になれたか？ 責任も取らずに。

それは、家康の命で徳川本隊を温存する為の作戦ではなかったのか。

家康が率いる東軍は、福島正則

を筆頭に、多くの豊臣温故の武将を抱えた勢力で、情勢によつては何が起ころるか分からない。

仮に東軍に裏切り者が出て、一時的に敗北したとしても、徳川軍本隊が健在であれば、もう一戦は十分にやれる。

なぜこの様に考えるかと言えば、
二手に分かれた東軍は、おおよそ
の日時を決めて進軍したただろう。

家康軍は東海道を進み、秀忠軍
は中山道を進んだ。この時の秀忠
軍は、本多正信筆頭に徳川精鋭部
隊であつて、こちらが本隊である。

そして、常識的に考えるならば、

合流するまでは突発的な戦鬪が起
こらない様にするはず。そして何
より、本当に秀忠自身の責任で決
戦に遅れたのなら、切腹、よくて
廃嫡。本多正信以下重臣の誰も処
分されていない。

この点も、古だぬきにしてやられて
いる気がする。

本能寺の変後、山崎の戦いで光
秀軍が敗れた時、家康は武田領の
切り取りを行っていた。

通信網が発達していないこの時代
において、仕方がない事であるが、

家康もやはり、秀吉との情報戦では完敗していた。

家康は、明智光秀とどこまで情報を共有していたのかは分からな
いが、斎藤利三などと徳川重臣た
ちの交流は頻繁であつたはずだ。

本能寺の変が起こる直前まで、

光秀は家康一行の接待役だったわけだから、家康の大坂見物の為の家臣団の打合せなどは、頻繁に行われ、親密さは増した事だろう。

私はこの時期に、本多正信が徳川家に帰参し、斎藤利三などと会合を重ねたと考えている。その証

抛となるのは後に述べるが、一言で言うなら、斎藤利三との関わり、後に正信が努力する斎藤家の縁者への気配りである。

安土の地でも会合を重ねているし、天正十年春を迎える頃には、光秀側の異様な雰囲気を利用三など

の振る舞いから正信たちも感じ取っていたのではないか。

私は、光秀が決行の決意を固めたのは、天正十年に入ってから、武田家を滅ぼした直後と考えている。

もちろん、恐怖や不安の負のエ

ネルギーは徐々に蓄積したてである
うが、決定的に覚悟を決めるのは、
信長の構想に気付いた時だろう。
それはいつか？

信長公記に、二月に信長が出し
た命令が書かれている。

明智光秀や細川忠興など明智方

に武田領への同行を命じ、わざわざ「遠国に付き人数は少なく」と指示している。

これは、明らかに関東見物であつて、戦いに出向くのではなく、同行武将たちにビジョンを聞かせる機会を設けたのではないだろう

か。

家康もこの時、国替えを持ちかけられたのではないか。

家康を信頼していただろうが、やはり自軍の駒であつて、信長の野望の為には使い捨てられる事は皆感じていただろう。

織田信長は大きな構想と信念のもと行動するから良いが、この関東見物で次なる使命を聞かされた諸将たちは心に期するものが芽生えたのではないか。「苦役に耐えかねる」、こんな心情であつたのかもしれない。

織田徳川同盟

桶狭間の戦い「永禄三年（一五六〇年）」は、その奇跡的な結末により、織田、徳川を結び付ける結果をもたらしした。

永禄四年の春に両将が会見。家

康は百人ほどの供を連れ清州に向いた。

信長は熱田まで出迎え礼節をもつて家康を迎えた。

織田、徳川同盟の締結である。

この同盟は、両者の思惑も一致したのであるが、以後信長の死

まで二十年に及ぶ堅い契りを全うする事となる。

この時代においては非常に珍しく誠実な同盟で、織田、徳川以外では結果として有り得なかつた。

今川家も、この同盟に対し黙つてはいなかつたが、今川氏真では

家康に対抗できず泣き寝入りする
しか無かった。

家康は両刀使いで、いかなる場
合も武装を解かなかつたが、武力
のみを頼りにしたのでもなく、外
交手腕にも優れていた。

家康流の交渉術は、粘り強く事

に当たるが、常に背後で戦鬪準備を怠らなかつた。

武力を乱用せず、必要最小限の行使にとどめた。

織田、徳川同盟がなつた「永禄四年」、その時、武田信玄と上杉謙信は、川中島での大決戦中の時

期にあたり、織田、徳川同盟の成立は、その他戦国大名たちよりも、頭一つは抜きに出た、大局を見据えた意識が途出していたと思われ
る。

天正十年に武田家の問題が完全に片付くまでは、信長にとって家

康は本当に必要な同盟者であった。確かに、この頃には徳川家の三河武士たちでさえ、信長を上様と表現している。家康が同盟者から配下の武将へと変化しつつある事は明白であろう。

しかし結果的にこの同盟は、信

長が本能寺で憤死するまで、一度も破られずに守られた珍しい関係であつた。

本能寺の変がなければ、家康にとつては辛い未来が待っていたであらう。

国替えはもちろんの事、四国、

九州と最前線へ送り込まれ、ゆくゆくは、中国大陸へ駆り出される。

秀吉が行った朝鮮出兵などの中
途半端なものではなく、信長自身
が総大将で大陸へ赴き、最強とな
った織田軍を率いて明と対峙する
壮大な物語へと投入されるだろう。

明王朝はこの時期、後継者争いや財政難で国自体が疲弊していた。この時信長軍が動けば、朝鮮半島はもとより、中国大陆全土を一代で支配できたのではないだろうか。

明王朝の政治よりは、信長の政

治の方が遥かに庶民の為にもなる
であろうし、皇帝は名乗るかもし
れないが、中国皇帝の伝統的な無
駄な贅沢は、良しとしないだろう。

私は、「第六天魔王」と名乗つ
て欲しいのだが、仮に信長が皇帝
となつた場合、何度も申し上げる

が、朝廷問題や官位問題、將軍職
については、どうでも良くなる
主張しているのであつて、篡奪な
どスケールが小さい話なのである。
もう少し話を膨らませると、
その先には、「元」のような王朝
になりうる可能性はあつたと想像

する。

では、チンギスハーン、そして五代皇帝フビライハーンのような国づくりができたかと言うと、天才の遺伝子は引き継がれないであろうから、信長亡き後は、北方のモンゴル勢力や満州族に悩まされ

て、領土を縮小して行くだろう。

結果的には、島国の統治へ戻るのかもしれないが、その時この国の形態はずいぶん違うものになっていった。良し悪しではなく、信長の寿命がもう少し長ければ、より壮大な野望を目にした事だけは間

違いないだろう。

本多正信

徳川家康の鷹匠として仕えていた人物。

永禄六年（一五六三年）、三河一向一揆が起こり、家康に敵対すると一向宗側の武将として徳川軍

と戦つた。一揆が鎮圧されると、徳川家を出奔し諸国を流浪した。

二十年にも及ぶ流浪の生活の後、徳川家への帰参を許され、その後は家康が最も信頼する武将となる。

正信は、家康の寢所にまで入る事を許される存在、重要な事の全

てを相談する相手であるという事になる。

二十年も放浪していた元配下の武将で、しかも裏切り者であった正信。

家康の元へ帰参がかなったのが、本能寺の変の少し前である。

明智側が接触するには打って付けの相手ではないだろうか。斎藤利三が本多正信と会合を持つ事は十分可能であるし、本能寺の変が起こった時に、例の「神君伊賀越え」に付き添ったとされている。ただし同行した者の名簿に名はな

い。だからこそ尚怪しい。

この後、武田領の併合、徳川軍への武田精鋭部隊の吸収。など、出奔生活二十年などないが如きの大活躍。ひよつとしたら家康の命を受けて諸国を巡り、情報を家康にもたらしていたのではないのか。

そう考えたくなるほど、復帰後の信頼と活躍は、徳川四天王を遥かに凌ぐ。

慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原の戦いに、徳川秀忠軍が遅参する事件のおり正信の上田城攻め中止要請を秀忠が受け入れなかった

と言われる。

信濃の上田城で真田昌幸の罫に掛かり、大事な決戦に間に合わなかつたわけだが、私は関ヶ原にわざと遅れたと確信しているので、正信と秀忠は逆に昌幸を利用したのではないか。先に述べた様に、

秀忠軍を温存する為に。

関ヶ原に向かう家康軍の構成は、豊臣恩顧の大名ばかりで、家康と一心同体ではないのである。

秀忠や正信が率いる徳川軍が本体であつて、万が一、諸侯が家康に反旗を翻しても徳川家とすれば

本軍で十分戦える状況を準備しておいただけの事ではないかと考える。

本多正信と斎藤利三、二人のつながりを示す資料は残されていない。

しかし、正信の帰参のタイミング

グや、伊賀越え武田領での采配など、とても二十年も流浪した者が帰参がかなって成しうるものではない。

この辺りに、明智、徳川連合軍に成り得た可能性が隠されているのではないだろうか。

間違いなく徳川方のキーマンである。

私は自説で、本能寺の変を考える時、利三と正信の下工作は十二分にあり、信長亡き世を画策した共同謀議があつたと考えている。だからこそ、後に徳川政権の時代

になつた時、斎藤家に縁する者の
多くを召し抱え、恩に報いたので
ある。

三職推任

勸修寺晴豊の日記「晴豊公記」
によると、天正十年四月二十五日
「村井所へ参候。安土へ女はうし
ゆ御くたし候て、太政大臣か関白
か將軍か、御すいにん候て可然候

よし被申候。その由申入候」、五月四日「のふなかより御らんと申候こしやうもちて、いかやうの御使のよし申候。関東打はたされ珍重間、將軍二なさるへきよしと申候へハ、又御らんもつて御書あかる也」と記されている。

この出来事は、同年五月三日に朝廷は勸修寺晴豊と女官を安土に派遣した。彼等は翌四日安土に着。信長に面会を求めたが信長は会わず、代わりに小姓の森乱丸（蘭丸）に用件を尋ねさせた。晴豊は、信長が関東を打ち果たしたの

で朝廷は将軍に任命する意向がある」と答えた。関東を打ち果たすとは、信長が武田家を滅ぼした事を指している。また将軍とは征夷大將軍の事をさすのだらう。

この時点では足利義昭は毛利家に庇護されいるとはいえ、将軍職

は罷免されてはいない。

六日になって漸く信長は晴豊に会うが、将軍についてや三職推任の件にも明確な返答をしていない。

やむなく翌日、晴豊は京都に戻った。

信長は、将軍任命について自身

の考えを伝えていない。交渉事を有利に進める為の手法だろうが、三職推任に関しては信長の完全勝利であつて勝負は付いていた。あとは、曆について押し切るだけであつた。

イエズス会の宣教師は、日本の

統治者は二人いると伝えているが（信長と正親町天皇）、実は三人いた。将軍義昭は健在である。担ぎ出される可能性は、まだまだ大いにあった。だからこそ本能寺の変は起こるのである。

暦の変更

六月一日、勸修寺晴豊は本能寺にいる信長に呼ばれ、今年の十二月の後に閏月を入れるよう要求された。

晴豊にとって、暦の件はこれで

二度目の要請になる。当時の暦は月の運行を基準にする太陰暦だった。暦には誤差がつきものである。

太陽暦（グレゴリオ暦）でも四年に一度、一日日数を増やして誤差を少なくしている（閏年）。太陰暦では一年は三五四日で、太陽

曆とは十一日の誤差が生じる。三年で約一カ月になるので三年ごとに一カ月増やす、つまり一年を十三カ月にするのである。この追加した月を閏月と言い、例えば一月と二月の間に追加すれば、それは閏一月と言った。

太陰曆を基本にして、閏月を追
加して誤差を少なくした曆を太陰
太陽曆と言う。当時の日本の曆は、
中国の唐の時代に作られて八五九
年に伝わって来た宣明曆（京曆）
だった。もちろん太陰太陽曆の一
種である。曆の作成は朝廷が独占

し、作成方法は陰陽寮によつて嚴重に秘せられていたが、時代が下るといつの間にか民間へ流布する様になつていた。また応仁の乱以降は、作成を担当していた勘解由小路家が断絶した為京で作られた曆が地方へ伝わりにくくなり、各

地で独自に暦を作る様になつていたのである（民間暦）。

当時、主に東国で用いられていた暦に三島暦と言うものがあつた。民間暦の一つで伊豆の河合氏によつて作られ、三島大社に奉納した為この名前がつけられた。

京暦も民間暦も、どちらも基本
は同じ太陰太陽暦だから、本来完
全に一致すべきものだった。しか
し現実には閏月の挿入方法等で微
妙な違いが生じ、それが混乱を巻
き起こすのである。

暦は、微妙でも誤差が出ると、

大きな混乱になる。

諸大名が使っている民間暦と京暦の月日が、一致していなかったらどうなるか。

天正九年（一五八一年）、朝廷は、閏月の設定を一五八三年の閏一月にする暦を作った。しかし三

島暦は一五八二年の閏十二月を設
定した事から、二種類の暦が作ら
れてしまったのだ。

正しい暦は京暦か、三島暦か、
どちらを基に年間のスケジュール
を組むのか。

信長に従う者たちはもちろん、

信長に採決を依頼した。一五八二年一月、信長は京曆を作る陰陽頭
の土御門久脩と曆博士の加茂在昌、
尾張の関係者を安土に呼び、互い
に討論させた。

しかし決着はつかず、翌月にな
って京都所司代の村井貞勝や、医

者で中国古典にも精通している曲直瀬道三を交えて再検討した結果、京暦が正しいとの結論を得て、これを信長に報告している。ここで暦の問題は収まったかにみえた。

ところが天正十年六月一日に、信長は勧修寺晴豊を呼び、この問題

を再度検討する様に申し渡したの
である。困惑した晴豊は、日記に
「信長は無理なことを言う」と書
いている。

ちなみに京暦と三島暦の閏月の
違いは小田原北条氏でも問題にな
り、詳細に計算した結果、三島暦

が正しいとの結論を出している。
勸修寺晴豊を呼び出したのは、閏
月の件での要求は何が何でも承諾
させる信長の強い意志の表れで、
もはや朝廷側に対抗手段は残され
ていなかった。

本能寺の変が起こる前日の事で

あつた。

翌日未明、信長は天に召された。

何とも言い難い偶然。いや必然。

自らを「第六天魔王」と名乗つ

た偉人の最後は、曆の問題の大詰

めで、閏の時である。信長でさえ、

時に手を出してはいけなかつたか。

現在世界中で使われているグレゴリオ暦が作られ、それまでのユリウス暦に代わってローマ教皇・グレゴリウス十三世に採用されたのはこの年（一五八二年）の二月である。

信長はこの事を知っていたのだ

ろうか？

いや、きつと知っていたのである
ろう！

何より、「時」に敏感で、鈍く
臆する者を嫌う天才「信長」、し
かし、使命も天命もここまであ
った。

この先、日本の歴史が続く以上、どの時代の誰よりも光り輝き続ける人物。

偉大な、第六天魔王「信長」最後。

ちなみに全国の暦が統一されるのは、江戸時代の貞享元年（一六

八四年）十月の事で、渋川春海の
手により、大和歴（貞享歴）が作
られた。大和歴は太陰太陽曆であ
り日本人が編纂した初めての和歴
である。

朝廷は一度詔を出して、明の大
統歴に改歴する予定であつたが、

渋川春海が採用を願い出た大和歴
を使用する事に変更した。

幕府の強い推薦もあつたのだろ
うが、朝廷が一度決め、ましてや
詔まで発しものを撤回するなど、
おおよそ信長が聞けば何と言うで
あろうか。

渋谷は、この功により、幕府から天文方に任召された。

彼は囲碁でも有名で、その人脈は徳川光圀や土御門家にまで及ぶ。万治二年（一六五九年）、御城碁で、本因坊道悦に勝利した。

寛文十年（一六七〇年）十月十

七日の御城碁で本因坊道策との対局において、初手天元を打つており、彼の天文の法則へのこだわりを見る事ができる。

「太極（北極星）の発想から初手は天元（碁盤中央）であるべき」
しかしこの時の大局で本因坊道

策に敗れて、天元は封印する事となる。

渋川春海は、江戸幕府碁方の安井家の出身（御城碁は、「本因坊」「井上」「安井」「林」の四家で行う）。

信長の時代より百年ほど後世の

出来ごとである。信長自身も囲碁は大変好きであつたようで、上洛した時、囲碁の名手として有名であつた、若き日蓮宗僧侶の日海を引見し、その碁を観て「名人」と讚えた。

これが名人の名前の始まりとも

言われる。日海は後の本因坊算砂である。

秀吉や家康も碁は好きであつたので、日海は仕えた。

慶長八年（一六〇三年）徳川家康が征夷大將軍に任じられた時、日海がお祝いに参上して、家康と

対局している。

唐突な処分

佐久間信盛は、信長が家督を継いだ当初からの宿老（家老）であり、常に信長に付き従った功勞者である。織田家の発展に欠かせなかつた人物である事は間違いない。

しかし、突然、信長の嫌気を被る。

しかも処分は非常に重たいもので、突然自筆の書状を佐久間信盛と、その子、信栄に送り付け、一九ヶ条からなる折檻状は、佐久間親子に弁明の機会も与えず、退去

を命じる者であつた。

信長公記によると、大坂に着いた信長公は、佐久間信盛に対して、大坂本願寺（石山本願寺）との戦いで、五年も布陣しながら何ら働きのない事。

明智光秀や羽柴秀吉の比類なき

働きを褒め称え、池田恒興が花隈城（神戸元町）を陥落させた事を天下の評判と称えている。

その他、朝倉攻めの不手際を持ち出したり、息子甚九朗信栄に至っては、不届き条々を書き並べれば、筆にも墨にも切りがないと書

いている。

佐久間信盛とは、分かりやすく言えば、徳川家康に対しての酒井忠次の様なものでこの折檻状は少し奇妙な思いがする。

文脈も一貫性に欠けるし、おおよそ信長らしくない。

処分を言い渡しているのだが、

「この上は何れかの敵を平らげ、
恥をそそいで帰参するか、また討
死するほかない」と言っている。

次に「父子ともに頭を剃り、高野
山にでも隠遁してひたすら赦免を
乞うのが妥当ではないか」と続く。

何だかよく分からない。

記録者である、太田牛一を全面的に信用するわけにはいかないが、追放された事実は追えるので、やはり信長の綻びのような気がする。この内容を何度読んでも、どう解釈しても凡庸で稚拙、執念深く意

味不明。

同じく処分が下された、林秀貞（通勝）も織田家の重鎮で、信長幼少の頃から仕えて来た武将。

信長の弟である信行（信勝）が謀反を企てた際に信行側に付いた。しかし許されて再び宿老として仕

えていた。

林秀貞の追放の理由の一つは、二十年以上前の謀反に荷担した事である。

丹羽右近氏勝も古くから織田家に仕えたが、追放された。

他にもこの時期に処分を言い渡

している。天正八年と云えば、本能寺の変の二年前にあたり、信玄、謙信ももはやこの世に居ないし、大坂本願寺（石山本願寺）顕如も退去した。信長にとつては、やつと落ち着いた時期であり、この後に嫡男信忠が武田勝頼を滅ぼし、

織田家絶頂を迎えるわけである。

何故この様な苛烈な処分がこの時に必要なのだろうか？

働きが気に入らないのであれば
激戦地へ送り込むか、はたまた即
隠居させるとかの手法が取れたは
ずである。これは、処分された方

に立ち述べているのではなく、信
長や織田家の為にもそうすべきで、
他の家臣が心の中で納得しない仕
打ちは、恐怖&不安となり「次は
自分かも知れない」と思わせてし
まい、心の奥底に潜む疑心暗鬼を
生むだけである。

織田信長

あらためて信長について触れた
い。

この男のスケールを考えると通
常の日本人ではない。もちろん散
々書いて来た様に欠陥も多いし歪

んだ一面もある。魔王と言えども人間には違いない。

だが、功罪とも、他の武将とは明らかに桁違い。さすがに自ら「第六天魔王」と名乗るだけの事はある。

信長が考える、朝廷や幕府対策

について考えてみたい。

先ず、足利義昭を旗頭にして京へ上り、実権を握った。

では、征夷大將軍を望んだらうか？

三職推任問題でもある様に、「
太政大臣」「関白」「征夷大將軍」

のどれでも選べる立場であつて、強要したのではないと考える。なぜか？

どれも選ばないからこそ、勸修寺晴豊が右往左往しているのではないか。

信長の目的や野望を推察すると、

見えて来るものがある。

幾つかの資料にも残されているし、秀吉の後の行動を見ると分かるのだが、日本国内のみの思考ではない。どの文献でも宣教師に対する態度や、貿易などへの興味、海外への思いが強い事が伝わる。

やはり、国内平定後は大陸へ進出するつもりであつたのではないだろうか。

秀吉は信長のプランのグラウンドデザインまでは理解していないから、サルまねに失敗したが、信長は明らかに織田軍団が明と対峙で

きるだけの力がある事を見抜いていた。

例えば鉄砲、この輸入された火縄銃は、信長の時代には国産化が可能で、性能も数も世界一となっていた。

明軍に対しても、数、質で圧倒

している。問題は硝石だが、鉄砲などの火器には、黒色火薬の原料として硝石が必要で、輸入に頼っていた。

信長は貿易を通じて、マカオなどから硝石の輸入が可能である事を知っていただろうし（マカオは、

中継基地）場合によつては、マカオまで領国にすれば良いぐらいに考えたかも知れない。

宣教師たちや貿易商を見ていて、なんだこの程度で、世界中との取引が可能なのかと思つたに違いない。

当初、鉄砲は多く輸入されたが、あつと言う間に国産化が進んだ。

日本から輸出されているもので、意外な物がある。それは、日本刀。それも、お得意様は明国なのである。

室町時代から輸出品として、数

十萬本は送っている。

ひよつとして、秀吉軍が明軍と交戦した時に敵方の武将の中に、日本刀をさしている者が居たかも知れない。

話を戻すが、信長はすでに世界を見ているので、天皇家を篡奪す

るとか、三職推任などの話は、信長の考えとは、次元が異なる気がする。

中国大陸に進出した後に、皇帝を名乗っただろうか？ いや名乗るなら「第六天魔王」であって欲しい。

將軍義昭も朝廷の様におとなし

くしておれば、將軍として京都の
室町に住めたであろうに、中途半
端に優秀であつたが為に、信長に
對抗できると考えたところが、不
幸であつて、秀吉の時代には、織
田信雄や織田有楽斎とともに「お

伽衆」として、秀吉に仕えている。次に取り上げるのは、信長の行った政策で、関所の廃止。

あの有名な「楽市・楽座」。これは、経済政策であって、一部の武将も行ってはいたが、本格的に広めたのは信長である。

支配下の諸大名には法令の発布として命じている（もちろん、制札として楽市楽座の語句が確認できるのは織田信長が初見である）。

信長以前には、各地の関所の数は膨大で、江戸時代の関所とは意味合いが異なっていた。各地の力

のある勢力が勝手に関所を設ける。
何の為に？

通行料を取る為にである。（関
銭）

なぜこういう事が可能かと言え
ば、室町幕府が機能していないか
らである。

この状態が問題あるのは誰にでも分かるし、商人は堪ったものではない。

この様な関所を設けるには、維持する武力が必要なので、一般庶民が勝手に設置する事はできない。各地の武将であつたり、寺社勢力

が設けるのである。

信長が関所を撤廃し、樂市樂座を推進すれば庶民は喜ぶわけで強力に支持される。

では、皆が喜ぶかと言えばさにあらず、寺社勢力や反織田勢力は、良しとしない。

だから争うわけで、お互いに生き残る為には至極当然。

この時代には、敵対する勢力同士は、互いに相手の息の根が止まるまでやり合うしかないだろう。

寺社勢力には、本来の活動目的からしても、武装解除をさせる必

要がある事は間違いない。社会的にも経済的にもである。

だから武器を持つ僧兵は、武装解除しないなら皆殺しにする。これは、敵対勢力だから当然の事かも知れない。

次に、武装解除して許しを請う

た場合の僧兵はどうするか？

いつまた武器を手にし刃向かう
やもしれないので、やはり皆殺し
にする（一理あるのでしかたがな
いだろう）。

では、最初から最後まで戦闘能
力ゼロの女、子供に対しての対応

はどうするのか？

ふもとの民で戦鬪が始まったから比叡山を頼り避難してきた非戦鬪員たちをも有無も言わせず、四方を囲った信長軍が皆殺しにした。比叡山の焼き討ちとは、こういう出来事なのである。

布石はあつた、比叡山は前年に、
浅井氏、朝倉氏に味方し、信長に
対峙した。

実はこの時の織田軍は、相当追
い込まれていて、三好、本願寺、
比叡山、浅井朝倉と多方面で戦わ
なくてはならなかつた。

しかし、さすが信長。

困った時の足利義昭なのである。性懲りもなく將軍義昭に働きかけて、朝廷からの勅許を得て、浅井朝倉と和睦に成功する。

この十五代將軍は、努力と信念の人ではあるが、ちよつと困った

御仁で、自ら打倒信長を、諸国の大名へ命じるのに、肝心な時に役に立たない。

これも、織田信長という男の力であろう。信長に対抗する勢力にしても、一枚岩ではなかつた。

三好勢と、將軍義昭の関係は、

兄（十三代将軍、足利義輝を殺した敵で逆臣）だし本願寺勢と比叡山勢の関係も微妙と言うより、過去の経緯からして敵対勢力である。だからこそこの、足利義昭将軍であつたが、この程度のが限界で、信長は見抜いていたのだらう。

もう一つ、よく聞く話で、「天文法華の乱」という非常に有名な事件がある。

法華宗（日蓮宗）の寺院に比叡山延暦寺側が焼き討ちを行い、女子供も含めて皆殺しにした争い。法華宗もまた、山科本願寺を焼き

討ちしている。

この時代の宗教勢力は、日本の国としては珍しく他宗教を忌み嫌い、本気で邪教と考え滅ぼそうと
していた。

話を戻すが、だからと言って、いかに信長であつても関係のない

女子供まで皆殺しにしても良い理
屈には絶対にならない！この点
だけははつきりしておきたい。

信長自身も虐殺命令を出す場合
に決して一貫性があるわけではな
く、場当たり的に対応が変わるの
である（一貫して皆殺しではもっ

と困るが)。

相手に非があるからと言つて同じことや、それ以上の酬いを与えてよいわけではない。

相手は関係ない者を皆殺しにして来たから、相手勢力の女子供や関係ない者を虐殺しても良いなど

という考え方は成り立たないはずだ。

なのに、一部の信長狂信者や臆員の引き倒しの方々は平気で主張する。「戦乱を終わらせる為、改革を実行する為、この国が変わる為には必要だった犠牲」。信長に

しかできないなどとのたまう。

日本の歴史上では、敵対する勢力に対しての皆殺しは非常に少ない。ましてや、里から逃げて来た武装宗教勢力と無関係な女子供まで殺す必要など、かけらほどもないのだ。

信長の先見性や優秀性、そして天才の部分認めると、やはりおかしとはいけない失政などを追及する事は全く別次元で行わないといけないはずである。

信長は日本の歴史上、並ぶ者がないぐらい素晴らしく偉大な人物

である事は間違いない。

が、欠点もあつただけの事。

正しく評価したいと思う。

ひよつとしたら、信長は精神的に病んでいたのかも知れないと思う。

信長が描いた様に天下統一が目

前に迫っていた。唐突な処分もそうだが、この国始まつて以来と評される能力に陰りが見えて来ていた。特に信玄が死に、謙信も死んだ後、その亡くなり方にも要因があるのかも知れないが、慎重さに欠けて来る。

自身を本気で神だと思ったのではないか。

天がおのれに使命を与えている。だからこそ、信玄も目前で死ぬし、謙信も信長攻めを決めた出陣寸前にこの世から居なくなる。

よく考えると、信長にとって最

も警戒すべき、両巨星が、信長に本気で牙を剥いた瞬間に身を滅ぼした。

もちろん偶然な出来事で、彼らの天命だったただけだが、信長の歯車をも狂わしたのかも知れない。

信玄、謙信と続き、その他抵抗

勢力も次々と織田家に屈して行く。
もはや本気でおのれを神で魔王
と思つたに違いない。

そびえ立つ安土城の天主で、信長
は何を思つたか。大陸へ進出し、
世界を目指すと決めたのではない
だらうか。

分不相応だとは思わない。

信長なら挑戦できたし、資質もあつた。

しかし、少し心が付いて行けなかつたのでないか？ 精神論を語

るつもりはないが彼が行つた無用な殺戮は、心の影の部分であつて、

誰にも止める事のできない病魔が
心を蝕んで行つたのでないか。

私は信長という人物の歴史に触
れる度に、孤独な心の闇の様な部
分をいつも感じてしまふ。

まあ、この大事業を成し遂げる
にあたり、正常な（一般的）神

経では成し得なかつたろう。

その点は、我々凡人でも理解でき
きる。

もしも信長に後半生があつたら。
こんな事を書いてはいけないのか
も知れないが、本能寺の変が起こ

らずに信長に後半生と呼べる時代
があればどうなっていたか？ 可
能性だけでも考えると面白い。

全国を統一した信長は次に何を
目指すか？

もちろん改革は継続するが、信
忠に命じていた様に、日本国内の

事は息子たちに任せ、信長自身は大陸へ進出したのではないか。ルイス・フロイスが書き残している様に、壮大な計画の片鱗が読み取れる。

秀吉なども聞き及んでいたからこそ、猿まね的に大陸へ進出を試

みたが、ビジョンのスケールが違
うので、結果ただの無謀な侵略と
しか成りえなかつた。

信長はあくまで、明と対峙した
であらうから、朝鮮半島で無益な
戦いを行わないであらう。

何より、信長軍は強い。この時

代では世界最強の軍隊である。

私は渡辺昇一氏の著書で徳富蘇峰の『近世日本国民史』を知り読んだ。実に朝鮮の役を詳しく記述し大変参考になつた。

朝鮮国はその当時、明の属国に近い状態であつた。秀吉の時代の

「文禄の役」は明が目的であつたが、「慶長の役」は、朝鮮征伐が目的となつてしまつていて、本来の目的から外れてしまつてゐる。

これは秀吉自身が衰えていて、若かりし頃の輝きが失せてしまつた結果であらう。

しかし、この様な秀吉軍であつても連戦連勝で、ほとんどの戦いで勝利している。

一部、海上戦では苦戦を強いられていているが、これも秀吉軍の功名争いや内輪もめの弊害が大きい。本題から逸れてしまうので、細か

い記述は控えるが、秀吉の朝鮮半島への進出は評価の分かれるところだと思うが、戦闘能力としてみれば強かった。

では、信長軍であればどうだろう？

明らかにもつと強い。なぜなら、

信長健在であれば、後に秀吉軍が犯したような過ちは少ない。宗義智や小西行長の様な、二枚舌の武將は存在しなかつたろうし、目的が明との対峙である以上、李氏朝鮮との間で無用な戦は控えたと思われる。

朝鮮側も明の圧力に苦しんでいた。たので、朝鮮半島を侵略するつもりがない事を明確にすれば、李氏朝鮮も明に頼る事をしなかつたかも知れない。

この時期、明も満州族の圧力に悩まされていたので、全軍を信長

軍に振り向ける事はできない。信長軍の装備は、鉄砲の量と質で世界一、明軍でも遠く及ばないし、李氏朝鮮軍にいたっては鉄砲そのものがほとんどない。地上部隊の戦力に関しても、戦国時代で鍛え上げられた精鋭たちを持つ信長軍

に明軍も齒が立たないであろう。

海の上での戦いに不安は残るが、信長は毛利水軍との戦いで使用したような鉄鋼船を作れるので、やはり五分以上の戦いになる。

海上交通をしつかりと確保できれば、兵站（補給）の心配がなくな

なるので、上陸軍は孤立せず、長期戦が可能となる。

統制がとれた信長軍の快進撃は、大陸の奥深くまで進出する事と成ったであろう。

明を滅ぼすまでの国力は無かつたかもしれないが、清の太祖とな

る「ヌルハチ」（満州族）などと
手を組むか、逆に明と交渉し、領
土の譲歩を迫れば、安定した大陸
進出が可能であつたらう。

信長健在であつてこそその構想で
ある。

私が考える信長の目的の一つは、

天皇家との問題があると思う。

安土城を築いて天主と称する場所に住んだ。

他の城は天守閣と呼び、主は住まない。信長独特の国家感があるのだろう。

想像するに、大陸進出を果たせ

ば、信長自身は勝ち取った領土に
居住し、日本国内は息子たちに任
せ、天皇家はそのまま存続。篡奪
する必要もない。

信長は、政をユーラシア大陸の
どこかで行い、貿易にも熱心に取
り組んだ事であろう。

島国以外の広大な領土を持つ信長を、世界中の人たちは、真の日本の王と認めるだろうが、信長自身は自分の事を何と称するのだろうか？

皇帝か？

武田信玄とのやり取りの中で、信玄が信長を「仏敵」と呼び、それに応じた信長が自らを「第六天魔王、信長」と称した。

「天魔王」と呼ばせたかも知れない。

やはり、この名は信長によく似

合う。

おわりに

「織田信長」という人物は、日本の歴史上、最高傑作と言って良
いと思う。

五十年弱の人生であつたが、本
能寺で幕を閉じる時に「是非に及

ばず」と言つたと「信長公記」に書かれている。

どう言う意味だろうか？

「あれこれ言つても、もはやどうしようもない」端的に考えて、この様な意味だろうか？ いや、違ふ様な気がする。

この時代の少し後に、有名な「直江状」で、家康に対して、「是非に及ばず候」と言っている。直江兼続が書き送った物とは、少々意味が異なる気がする。

では、三河物語で記述されている様に、変の首謀者が光秀である

ならば、もはややむを得ない、の
意味なのか？ 本能寺が襲われた
時に明智勢と分かつて信長はあき
らめるのだろうか？ これも有り
得ないと思う。

信長の頭によぎるものは、明智
軍の兵力（元々信長が貸し与えて

いる軍勢が中心）そして、嫡男信忠が保有する兵力（三千）、京都所司代の村井貞勝配下の数など、瞬時に計算し、時を稼げば何が起こるか分からないと判断したのではないか。

時を稼ぐとは、この場合は応戦

しか有り得ない。

最後まであきらめないという、
自分を信じた行動で、もし信忠が、
三千の兵で本能寺に切り込んでい
たら、戦場は大混乱で、活路は開
けたかも知れない。

しかし、それは不可能であつた。

なぜか、本書で散々明らかにして来たが、明智軍の行動はよくできたもので、作戦としては、非常にレベルが高く完成度の高いものであつたからである。

本能寺の変が起こつた時刻、信忠も京都所司代村井貞勝も自由に

行動している。

妙覚寺に滞在していたわけだから、京へ入って来た明智勢には気が付いていたのは当たり前で、村井貞勝などは、京都所司代として出迎えに参じていたのではないだろうか。

もちろん、本能寺の近くまで軍は進むし、翌朝は、信長に拝謁するなど、出陣の式典がもよおされる予定ではなかつたか。

この様に考えないと、明智軍が京へ独断で向かったとか、誰も知られない様に本能寺を囲んだと

か、有りもしないでたらめな状況
証拠で予想するから導き出される
結論が、真実を見えにくくする。

信忠自身は、何を置いても京を
脱出すべきであつて、信長なら間
違いなくそうしただろう。この時
にはすでに、織田家当主は信忠で

あつて信長ではない。したがつて
信長は助からなかつたとしても、
信忠さえ健在ならば、秀吉の中国
大返しを待つまでもなく、堺方面
に集結している、長宗我部征伐軍
と合流すれば即、大決戦が可能で、
兵力の増強力を考えると信忠軍が

圧倒的に有利だ。

本能寺に向かう明智軍について
検証したい。老ノ坂より京へ向か
う。この道は非常に狭く三メートル
にも満たない。一万三千人もの
兵力が行軍するとなると、横二列
がやっと。先陣が京へ着いた後、

何時間ものタイムラグが発生する。ましてや、軽装備とはいえ、軍装で行軍するわけであるから、大音響が京の町中に響き渡る。

この時、光秀や利三は、全軍に「備中出陣の為、お館様に拝謁する」と指令を出し本能寺に近づい

た段階で、敵は本能寺にありと号令したのだらう。この時に敵名が具体的に伝達されたとする資料があり、「家康」を襲う事になつてゐる。

この辺りは、光秀や利三からの指令でその様に装つたのか、動き

の鈍い部下に対して、一部の武将が家康の名を利用したのかは不明だが、少なくとも織田軍の中では、家康を打つという表現が、この頃、不自然ではなかった事は確かだろう。

今回、本能寺の変を取り上げる

にあたり、どうしても書きたかった事柄は、徳川家康と斉藤利三との関係。家康は利三の思いをどこかの時点で知り、明智光秀の考えを聞き及んだのではないか。確かに信長は天才で家康にとっても偉大な存在で尊敬していたであろう。

しかし、人間は変化するものであり、天正年間に入ってから信長は明らかに織田家栄達、息子たちへの権力の移譲を進め出した。

忠臣の鎌倉時代とは異なり、下克上を経験した武将たちで満ち溢れている時代であるので、信長の

変化は敏感に感じ取ったであろう。後に家康も征夷大將軍を朝廷より授かり、旧来のシステムを尊重する様に、この時代ですら劇的な構造改革は誰も望んでは居なかつた。ただ一人を除いて。

しかし、信長は配下の武将たち

の心の変化に気が着かないし、興味も無い。本書でも何度も触れた様に、信長軍の中から、非常に多くの武将が裏切りを繰り返す。

事情は様々であるが、大将が信長であるがゆえに、やむにやまれず滅亡覚悟で腹をくくる武将の多

い事、この上ない。

家康は、信長や秀吉を参考にする前から、天才ではない自分の力量をよく理解していて、どんな時も用心を怠らない、平時でも武装を解かない、言わば小心者であったのであるから、一七〇年にも及ぶ、

世界的に見ても稀有な安定した政
権作りを可能にしたと言える。

大天才、大魔王「信長」。

人心掌握術に長けた天才「秀吉」

。

己をよく知っていた「家康」。

本能寺の変の後に導き出せるも

の。

家康（徳川家）は、明らかに明智家、いや「斎藤家」一族に恩を返している。

その後の時代を見てみると、斎藤家に縁する者たちの異様な栄達ぶり。

代表的な例は、誰もが知つてい
る「お福」後の「春日局」。お福
に関しては、乳母（この場合、教
育係のようなもの）の募集が公募
であり、それにお福が応募したと
か京都所司代の板倉勝重に推挙さ
れたとか。親戚にあたる三条西公

国の元で養育されて乳母に採用されたなどの話が伝わる。

しかしいつたい誰の乳母だと考えての説であろうか？ 「竹千代」

後の三代將軍家光の乳母なのである（松平家の世継の幼名は竹千代。家康の幼名も竹千代）。

よく考えて欲しい。

徳川家の跡取りとなる竹千代に
対して、斎藤利三の娘が乳母に採
用される可能性があるのかどうか
を。

春日局に関しの記載で、反織田
反豊臣ゆえに採用されたかのような

表現を目にするが有り得ない。武家の世界で逆臣の娘が將軍家の乳母になる事など、絶対にないのではないか。

では、お福は一体何だったのか？ 簡単な結果が導き出せる。

「逆臣」の娘ではなかったの

ある。少なくとも、家康、徳川家
にとつては、恩人の娘。

それだけなら、お福を乳母に採
用する事ぐらいで報いは十分であ
るはず。

春日局「従三位」(その後、従
二位に昇叙)になり、生まれなが

らの将軍と言われた、徳川三代将軍「家光」を誕生させ、大奥を仕切るほどの立場になるには、本人の能力だけでは不可能な次元の話。ちなみに従二位の官位は、あの北条政子と同じで、頼朝亡き後、武家社会を引っ張った人と同位で

ある。

徳川家が恩に報いたのは、お福
だけではなく、乳母採用の為に離
縁した夫、稲葉正成は後に家康に
召しだされ、以後徳川家の家臣と
して仕える。一万石の大名に取り
立てられた後、大阪夏の陣では、

豊臣方への攻撃で戦功を挙げ、越後糸魚川に二万石の所領を与えられた。その後、勝手に出奔し浪人となるが、幕府の命で蟄居の後、下野真岡二万石に封じられた。徳川幕府が、外様大名などに厳しく対処していた頃にしては、随分甘

い対応である。もちろん、関ヶ原での貢献や、大阪の役での力量は一流であるが、幕府の命に従わず、勝手に出奔する武将が、寛永四年（一六二七年） 当時に大名に復帰する事など通常、有り得ない。前にも述べたが、徳川家古参の三河

武士たちも、お福に関係する人たちの処遇に異を唱えた様子が伺えない。

あの、家康にすら意見するうるさ方の古参たちが承認しているである。

稲葉正成は、天下分け目の関ヶ

原の戦いで、西軍を裏切り、大谷刑部（吉継）勢に攻めかかった、かの有名な小早川秀秋の側近として仕え、寝返り工作を成功させている。

さらに、稲葉正成と先妻の娘の子である、堀田正盛は、北条氏が

支配していた、下総佐倉十一万石を拝領した。

下総佐倉は、江戸の東を守る重要な要衝の地である。正盛は、家光の死去に伴い、阿部重次と共に殉じた人である。

その長男、二代堀田正信は後に

改易となるが、弟の脇坂安政、堀田正俊、堀田正英南部勝直、揃いもそろって大出世である。

もつと凄いのは、お福の兄弟、すなわち斎藤利三の息子たちまでが、信じられないほどの出世をしている。三男利宗は、山崎の合戦

後に加藤清正に仕え、清正が亡くなる
となると、妹である春日局の口利き
で、三代将軍家光に拝謁し、常陸
の国真壁で五千石を知行する旗本
となつた。「旗本」にである。

寛永六年（一六二九年）の事で
あり、この時代、将軍に拝謁し、

即旗本へ採用される事があるとお
考えだろうか？

この時代の論功行賞は露骨で分
かりやすい。

では、ここであげた事柄は、何
を意味するのか？ 明智家への恩
と言うよりは、明らかに斎藤家、

その関係する一族への特別な配慮。そう考えるのが自然だと思う。

お福の尋常ではない出世にばかり目が行くが、徳川家としてはどうしても報いたいと願っていたのだらう。家康が亡くなつてから、徳川家の外様大名への対応は厳し

くなる。その代表例は福島正則への対応で、結果は改易。

そんな時代に出世して行く斎藤一族関係者たち。徳川家は明らかに、大恩ある斎藤家に借りを返しているとしか思えない。

その源流は、本能寺の変につな

がる。あの時期の、明智、徳川、斎藤家の置かれていた状況。本当に窮地に追いやられていたのは、徳川家ではなかったのか、信長に追い詰められていたのは家康であつて、利害が一致したとはいえ、手を下してくれた斎藤利三、決断

した明智光秀の構図ではなかったのか。

利三は、山崎の合戦で敗れた後に捕えられて、六条河原で斬首された（山崎の合戦では、子息、斎藤利康も討死している。享年十九）。

秀吉側の執拗な取り調べでも、

徳川家との連携（心の連携を含む）
については、一切、語ってはいない。
もし、この時点で家康について、
事実無根だとしても秀吉が共
犯の証拠を掴めば、家康は絶体絶
命であつたらう。

秀吉は、信長の存命中に、家康

に降りかかる危機を知っていたと思われる。

中国攻め、毛利の一件が片付いたら、次は島津攻め。この戦いは、家康は間違いなく駆り出される。その先に待つのは、九州へ転封であつたかもしれない。

織田軍の中では常識であつたのではないか。秀吉にしても、領地は安泰でなく、中国地方辺りに移されて、次に信長が目指すであろう、大陸への進出の先鋒を命じられる危機。

擦り減つて行く精神は、もはや

限界であつた。そう、織田軍の全
ての武将たちが「恐怖と不安」に
慄いていた。

魔王信長に対して、限界であつ
た。

変の当日の家康の行動、その後、
国元へ戻る道中など、捏造し後世

に事実を隠したが恩に報いた結果だけは隠せなかつた。

第六天魔王、信長。

彼は、全ての面で、この国の常識におさまらず、自身の信念で突き進んだ。

しかし人間の未熟さゆえ滅んだ。
まるで、暦の流れが、天によつ
て改めさせられる様に、大きな役
割を終えて消え去った。

日本歴史上、奇跡の人であつた。

完